二宮遺跡　発掘調査報告書

－第２次発掘調査－

2003
神戸市教育委員会

二宮遺跡　発掘調査報告書

-第２次発掘調査-

2003
神戸市教育委員会

序文

中央区三ノ宮はJRや阪急・阪神などの駅が集まる、神戸の表玄関とも言える場所で、ここから新神戸までの界隈は、神戸でも最も多くの人が集まる場所と言えるでしょう。

ここに報告します二宮遺跡は、こうした繁華街に立地した遺跡ですが、実は意外に多くの遺跡が残されていることが最近の発掘調査の成果として次々と明らかになりつつあります。

遺跡は、一見地面に残された、ただの穴の集まりのように見えるものの、過去の人々の多彩な生活の様子を伝えています。遺跡に残るこれらのメッセージには、現代に生きる私たちにとっても、深い意味を持ち、また示唆に富むものではないかと考えられます。

私たちの役割は、自らが語ることのない、声の無い遺跡の言葉を、発掘調査という検証の「目」を通して、市民の皆様に伝え、守り、その活用を図ることであると考えています。また、私たちには、今日にまで伝えられた「文化財」という祖先からの遺産を、次世代に届ける義務があり、遺跡に残る古代の人々の知恵を過去への追憶に終わらせず、積極的に活用していく必要があるのではないでしょうか。

本書は、国民の共有の財産である文化財や遺跡の発掘調査について、より多くの方々に知って頂たいとの方針で編集しました。古代の遺跡からのメッセージが皆様に届くことを願っております。

平成15年12月

神戸市教育委員会

—謝辞—

現地発掘調査および出土品整理作業と本書の刊行にあたり、調査原因者である（株）和田興産および、関係各位から多くのご協力をいただきました。

厚く感謝し、この場に記して御礼申し上げます。

例言

1．この本は、神戸市中央区二宮町2丁目にある、二宮遺跡第２次発掘調査の報告書です。

2．この調査は、民間の共同住宅建設を原因とするもので、神戸市教育委員会が、平成15年２月19日から、平成15年12月28日まで実施したものです。

3．この本の中で使用されている方位は座標北を示すもので、水準値（標高）は東京湾中等潮位（T.P.）です。国土座標は世界測地系を用いています。

4．この本の中で使用した遺物写真は、杉本和樹氏に撮影作業を委託して撮影されたものです。

5．二宮遺跡第2次調査は、平成14年度の現地発掘調査と平成15年度の出土品の整理作業との、二ヵ年にわたって行われました。各年度で調査にあたった組織は、下記のとおりです。

現地発掘調査（平成14年度）

教育長	西川　和機
社会教育部長	岩畔　法夫
文化財課長	桑原　泰豊
埋蔵文化財調査係長	丹治　康明
調査担当学芸員	石島　三和

出土品整理作業（平成15年度）

教育長	西川　和機
社会教育部長	高橋　英比古
文化財課参事	桑原　泰豊
埋蔵文化財調査係長	丹治　康明
保存科学担当学芸員	中村　大介
整理担当学芸員	石島　三和

6．この本の作成は、神戸市教育委員会学芸員　石島　三和が担当し、文章を執筆・編集作業を行いました。

7．第３章ｆ節「金属製品と動物遺存体」については、神戸市教育委員会学芸委員　中村　大介が調査、執筆を担当しました。

8．現地での発掘調査および出土品の整理・調査は原因者である（株）和田興産の費用負担により行われました。また調査にあたっては（株）和田興産および関係各位より多大なご協力をいただきました。

二宮遺跡発掘調査報告書

-第２次調査-

目次

第１章　はじめに …… 1

第1節 二宮遺跡の発見 …… 1

第2節 二宮遺跡をとりまく環境 …… 3

第3節 1400年前の鍛冶師のムラ …… 3

第4節 第2次発掘調査に至る経緯 …… 5

第２章　遺構 …… 7

第1節 調査地内の地層 …… 7

第2節 河川跡 …… 8

第3節 用水路跡 …… 10

第4節 時期不明のピット群 …… 13

第３章　遺物 …… 16

第1節 用水路跡出土の遺物 …… 21

a…用水路跡出土の遺物…… 16　　b…遺物の時期…… 20

第2節 河川跡出土の遺物 …… 21

a…河川内第５層出土の土器…… 21　　b…河川内第４層出土の土器…… 26

c…河川内第２層出土の土器…… 27　　d…河川内第１層出土の土器…… 28

e…遺物の時期…… 29　　f…金属製品と動物遺存体…… 31

第４章 まとめ …… 34

図　　版

挿図（地図１）　二宮遺跡の位置（１／25,000）…… 2
挿図（地図２）　二宮遺跡周辺の遺跡分布 …… 4
挿図（地図３）　二宮遺跡第２次調査地の位置（１／2,500）…… 6
挿図（図１）　調査地内地層の堆積状況 …… 7
挿図（図２）　河川跡（第１遺構面）平面図 …… 9
挿図（図３）　河川内堆積層の状態 …… 10
挿図（図４）　用水路跡（第２遺構面）平面図 …… 12
挿図（図５）　用水路（SD201）平・断面図 …… 14
挿図（図６）　調査地北端（第２遺構面）平面図 …… 15
挿図（図７）　用水路跡（SD201）出土土器　実測図 …… 18
挿図（図８）　河川内第５層出土土器　実測図 …… 22
挿図（図９）　河川内第４層出土土器　実測図 …… 24
挿図（図10）　河川内第２層出土土器　実測図 …… 26
挿図（図11）　河川内第１層出土土器　実測図 …… 29
挿図（図12）　出土金属製品　実測図 …… 31

挿図写真（写真１）　二宮遺跡第2次調査地周辺の風景…… 6
挿図写真（写真２）　出土金属製品 …… 32
挿図写真（写真３）　同X線透過像 …… 32
挿図写真（写真４）　出土帯金具 …… 33
挿図写真（写真５）　同X線透過像 …… 33
挿図写真（写真６）　出土牛歯 …… 33

写真図版１．飛鳥時代の用水路…… PL.1
写真図版２．飛鳥時代の用水路跡から出土した土器（北方向から撮影）…… PL.2
写真図版３．飛鳥時代の用水路跡から出土した土器（北西方向から撮影）…… PL.2
写真図版４．13世紀の河川の跡（北方向から撮影）…… PL.3
写真図版５．13世紀の河川跡と東岸（南方向から撮影）…… PL.4
写真図版６．13世紀の河川跡と東岸（西方向から撮影）…… PL.4
写真図版７．13世紀の河川跡と東岸（北方向から撮影）…… PL.5
写真図版８．調査地北端で確認された時期不明の遺構（南方向から撮影）…… PL.5
写真図版９．飛鳥時代の用水路（SD201）出土　土師器 …… PL.6
写真図版10．飛鳥時代の用水路（SD201）出土　土師器 …… PL.6
写真図版11．飛鳥時代の用水路（SD201）出土土器 …… PL.7
写真図版12．飛鳥時代の用水路（SD201）出土須恵器　蓋 …… PL.7
写真図版13．飛鳥時代の用水路（SD201）出土須恵器　坏 …… PL.7
写真図版14．飛鳥時代の用水路（SD201）出土須恵器　坏 …… PL.7
写真図版15．13世紀の河川内第５層出土須恵器　皿 …… PL.7
写真図版16．13世紀の河川内第５層出土瓦器　皿 …… PL.7
写真図版17．13世紀の河川内第５層出土須恵器　皿 …… PL.7
写真図版18．13世紀の河川内第５層出土須恵器　皿 …… PL.7
写真図版19．13世紀の河川内第５層出土瓦器　椀 …… PL.8
写真図版20．13世紀の河川内第５層出土土師器　皿 …… PL.8
写真図版21．13世紀の河川内第５層出土土師器　皿 …… PL.8
写真図版22．13世紀の河川内第５層出土須恵器　鉢 …… PL.8
写真図版23．13世紀の河川内第５層出土真蛸壺 …… PL.8
写真図版24．13世紀の河川内第５層出土緑釉陶器 …… PL.8
写真図版25．13世紀の河川内第５層出土灰釉陶器 …… PL.8
写真図版26．13世紀の河川内第５層出土白磁　椀 …… PL.8
写真図版28．13世紀の河川内出土の銅銭 …… PL.8
写真図版29．飛鳥時代の用水路（SD201）出土　帯金具 …… PL.8
写真図版30．13世紀の河川内第２層と第５層出土の土器 …… PL.9
写真図版31．13世紀の河川内第２層と第５層出土の土器 …… PL.9
写真図版32．13世紀の河川内第５層出土の土器 …… PL.10
写真図版33．13世紀の河川内第１層と第４層出土の土器 …… PL.10

第1章　はじめに

第1節　二宮遺跡の発見

街中の遺跡群

神戸市中央区の、JR三宮駅と阪急電鉄三宮駅とがほぼ平行に走り、多くの電車や人が行き来するあたりの地区は、神戸でももっとも人通りの多い場所の一つである。

異国情緒ある瀟洒な観光都市のイメージが強い神戸の、玄関口ともいえるこの地区の地下に、数千年も昔の遺跡が数多く眠っているという事実は、意外と知られていない。

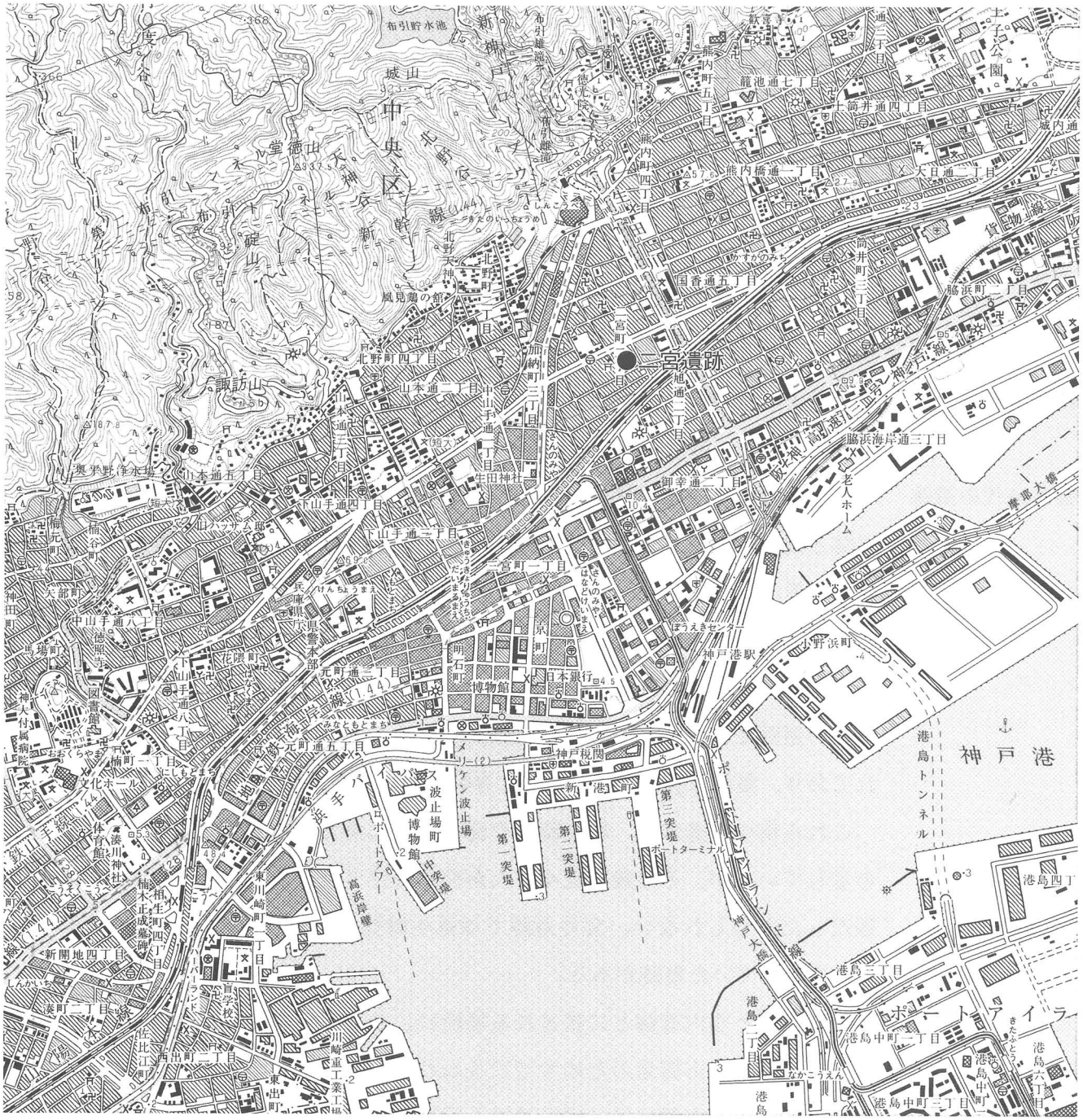
三ノ宮駅のプラットホームから北側に視線を向けると、都会の街並みの向こうに国定公園六甲山が見える。夜はライトアップされ、港町神戸のシンボルである碇の形が浮き上がって見えるこの山のすぐ手前には、新神戸駅と駅前の高層ビルのモダンなシルエットを見ることができる。三宮駅が近隣からの客のための玄関口なら、新幹線の発着駅である新神戸駅は遠来の客を迎える玄関口と言えるだろう。

三宮駅をでて、新神戸駅まで歩こうとすると、六甲山に向かって歩くことになり、必然的に坂道をあがらねばならなくなる。電車を降り、東改札口を出て、高架沿いに少し東へ歩く。それから二宮筋の商店街に入ると、北に向かって緩やかな坂道を上がっていく途中に二宮神社が見える。神社の東側を流れる生田川に沿ってそのさらに北へ坂を上っていけば、やがて新神戸駅に至る。

三宮から元町にかけての一帯には、一宮からはじまって、二宮、三宮、四宮、七宮という名の神社が点在している。JR元町駅の南に三宮神社があり、その一帯が三宮町である。そしてその北東に位置する二宮神社界隈は二宮町と呼ばれている。この二宮神社のすぐ北側の地下に、これから本書で発掘調査結果について報告する二宮遺跡は存在する。

第1次発掘調査

先ほど紹介した三宮から新神戸までの道のりは、実は延々と地下に続くいくつもの遺跡をたどりながら歩く道のりでもある。遺跡群の概略については次の節でふれるが、二宮遺跡も、これら三宮から新神戸駅までの一帯に広がる遺跡群のなかの一つなのである。この遺跡が発見されたのは、ごく最近の出来事である。平成10年に二宮町3丁目でマンションの建設計画が立てられた際に、建設予定地内に遺跡が存在すると確認されたのが最初である。その後遺跡は地名をとって、二宮遺跡と名づけられ、工事に先立って発掘調査が行われることになった。



地図1　二宮遺跡の位置（S=1／25,000）

神戸市中央区二宮町の地下には、飛鳥時代の集落遺跡が眠っている。平成10年に発見されたこの遺跡は、地名をとって二宮遺跡と呼ばれている。

二宮遺跡付近は、JR三宮駅を中心とした市街地区域だが、縄文時代から中世まで、幅広い時代の遺跡がいくつも発見されている。

第２節　二宮遺跡をとりまく環境

飛鳥時代の鍛冶師のムラという、神戸市内でも珍しい遺跡である二宮遺跡だが、第１節でもふれたように、その周辺には多くの遺跡が存在する。

二宮遺跡で南にむかうと、正面に海が、背後に六甲山を背負う立地になる。この六甲山周辺には、飛鳥時代を遠くさかのぼる縄文時代にはすでに人が居住していたようだ。二宮遺跡の北わずか500mの距離に、当時の人々が集落を形成していた痕跡がある。

縄文時代の遺跡

そのムラは現在熊内遺跡とよばれている。熊内遺跡では縄文時代の遺構の上に重なるように、弥生時代の遺構が発見されている。

弥生時代の遺跡

弥生時代には、水稲耕作の普及によって人口は増加に傾向にあったろう。二宮遺跡と隣接する雲井地区では、弥生時代がはじまるとともに広大な集落が形成されている。

雲井遺跡と呼ばれるこの2000年以上前の集落は、現在の琴ノ緒町から南へ、JRの線路をこえて雲井通までひろがっている。

この遺跡では、いくつもの竪穴住居や墓地などがこれまでの発掘調査で発見されており、集落は数百年にわたって存続したと考えられている。

これら街中の遺跡は、縄文時代や弥生時代にすでに開かれた土地であったことを示しているが、その後も延々と人が住み続けて今日にいたっているのに近い状態だったかもしれない。雲井遺跡では弥生時代がおわり、古墳時代に入っても、人が生活していた痕跡がある。

古墳時代の遺跡

二宮遺跡と熊内遺跡とに挟まれる場所に、かつては古墳が点在していたことが知られている。市街地のためすでに失われてしまったものも少なくないが、これら古墳群のすぐ南側には二宮町遺跡と呼ばれる、この時代の集落遺跡が発見されている。そのほか生田町のあたりでも遺跡が発見されている。点在する古墳はおそらく、それらのムラに影響力のあった人物たちの墓地なのではないかと考えられる。

古墳時代の後、飛鳥時代を経て、鎌倉時代や室町時代になるが、このころが中世という区分で呼ばれる時代である。

中世の遺跡

雲井遺跡ではこのころの集落が発見されているし、今回の二宮遺跡の調査でも、中世の遺構を確認している。それ以外にもいくつか近隣には中世の遺跡が発見されている。

地図2　二宮遺跡周辺の遺跡分布

1．二宮遺跡　2．雲井遺跡　3．熊内遺跡　4．三本松古墳・割塚古墳他　5．二宮町遺跡　6．生田遺跡
7．花隈城向城跡　8．花隈城跡　9．小野柄遺跡　10.日暮遺跡　11.滝山城　12.布引丸山遺跡　45.吾妻遺跡
（3＝縄文時代～弥生時代　12＝弥生時代　9＝弥生時代、中世　2＝弥生時代～古墳時代、中世　4、5、6＝古墳時代
10＝古墳時代、中世　1＝飛鳥時代、中世　7、8、11＝中世）

地図2　二宮遺跡周辺の遺跡分布

1．二宮遺跡　2．雲井遺跡　3．熊内遺跡　4．三本松古墳・割塚古墳他　5．二宮町遺跡　6．生田遺跡
7．花隈城向城跡　8．花隈城跡　9．小野柄遺跡　10.日暮遺跡　11.滝山城　12.布引丸山遺跡　45.吾妻遺跡
（3＝縄文時代～弥生時代　12＝弥生時代　9＝弥生時代、中世　2＝弥生時代～古墳時代、中世　4、5、6＝古墳時代
10＝古墳時代、中世　1＝飛鳥時代、中世　7、8、11＝中世）

第3節　1400年前の鍛冶師のムラ

1400年前の遺跡

平成10年に行われた大規模な発掘調査の結果、地下に眠っていたのは、今から約1400年前、飛鳥時代のムラの遺跡だったと判明した。飛鳥時代といえば歴史の教科書などでは、聖徳太子や蘇我氏といった人々が活躍し、海を越えて中国から初めて仏教の思想が日本に伝わった時代として紹介されている頃である。

鍛冶炉の発見

1400年前の集落の跡であることがわかった二宮遺跡だが、それ以外にも少し変わった発見があった。神戸市内で飛鳥時代の集落跡が発見されることだけでも例の少ない珍しい出来事だったのだが、発掘で姿を現した1400年前の村には、鍛冶師と呼ばれる人々が鉄を製品化していたと考えられる鍛冶炉や、彼らの住居と考えられる掘立柱建物や竪穴住居などの遺構が残されていたのである。このとき発見された鍛冶炉は、野天にむきだしの形で造られる炉が多い時代に、炉の上に屋根がかけられており、飛鳥時代の鍛冶炉としては珍しい構造だったため、新聞などでも大々的に報道されることとなり世間の注目を集めた。

重なり合う集落遺跡

また、飛鳥時代の鍛冶炉の遺跡の上には、奈良時代、平安時代、鎌倉時代といったもっと新しい時代の遺跡も時代順に互いに重なり合うように残されていたため、今日では二宮遺跡は、飛鳥時代に鍛冶師のムラとして始まり、中世までの長い期間にわたって集落が存続したのではないかと考えられている。

第4節　第2次発掘調査に至る経緯

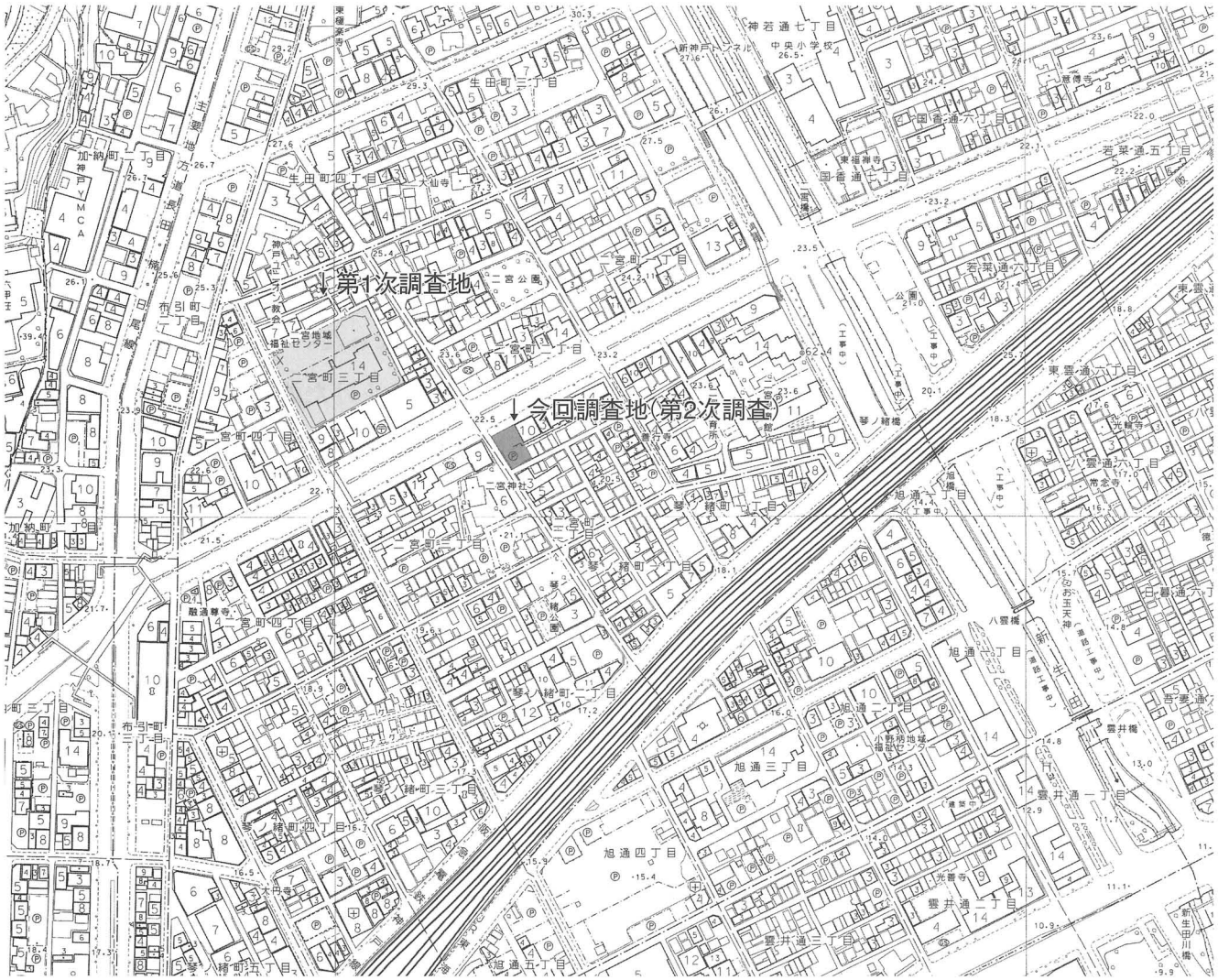
第2次調査の開始

本書で報告する発掘調査は、この鍛冶工房跡の発見から5年後の平成15年に、前回の調査地から南に約400mの二宮町2丁目地点で実施されたもので、二宮遺跡内での第2回目の調査となるため、第2次調査と呼ばれている。

調査対象範囲

第2次調査もマンション建設にともなうものである。発掘調査がおこなわれたのは、地図3に示した位置で、建設工事範囲のうち、本来の地層が破壊されて遺跡が失われている部分を除く320㎡であった。

実際に工事がおこなわれた範囲は320㎡よりもっと広いものだったが、遺跡の場所はにぎやかな市街地であり、遺跡が発見されるずっと以前から高層ビルが立ち並んでいたため、古い時代のビル建設によってすでに、地下にある遺跡の残されている古い地層は破壊されていた。そのためこのような理由で遺跡も失われているとあらかじめわかっている箇所については、調査範囲から除外されたのである。



地図3　二宮遺跡第2次調査地の位置（S=1／2,500）

平成10年に行われた第1次発掘調査では、飛鳥時代の鍛冶炉や住居跡が発見されたため、二宮遺跡は大きく新聞で取り上げられ、話題となった。

写真1　二宮遺跡第2次調査地周辺の風景

第２章　遺構

第１節　調査地内の地層

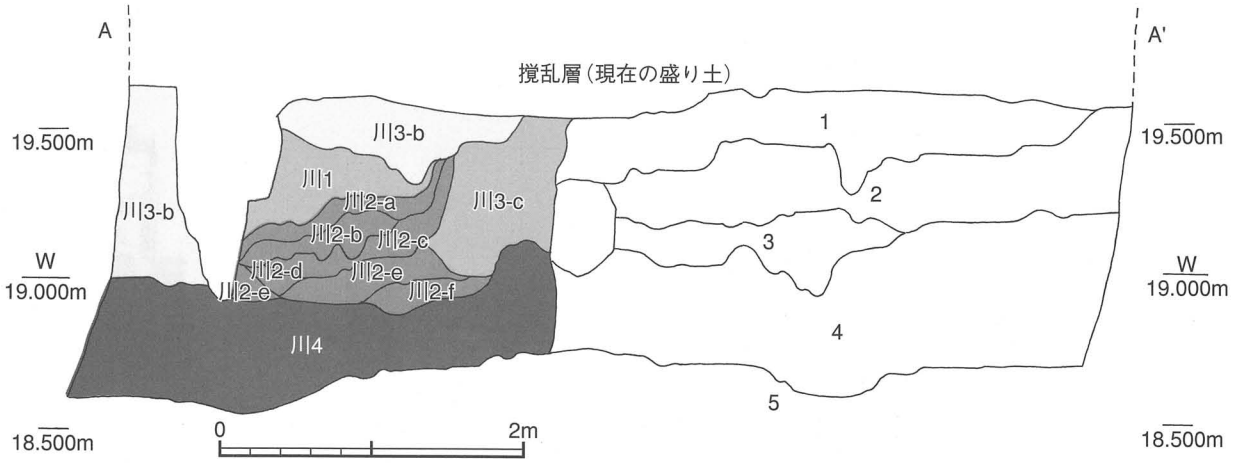
第２次調査地がある二宮町２丁目はちょうど六甲山の南のふもとにあたり、その地形は北から南に下がる坂になっている。そのため地面から遺跡の層までの深さも、調査地の北端と南端で大きく異なる結果となった。

地下2.50mの遺跡

調査区の北端では、地面から地下に約2.50m掘り下げた地点で、遺跡の層に到達する。一方南端では現在の地面から地下に約1.70mの地点で遺跡の層が現れる。遺跡の層の深さを標高で表すと、現在の地面が北側で21.80m、南側で20.70mくらいとなり、それに対する遺跡の地層は北側で19.30m、南側で19.00m地点付近に位置することになる。

標高19.30m～19.00mまで掘り下げた地下には、異なる二つの時代の遺跡の層が上下に重なり合う状態で発見された。

第2次調査地の地層の堆積を、上から順に見てみよう。このあたりは、古くから市街化のすすんだ地区で、多くの高層ビルが立ち並んでいる。そのため、地面の層や、そのすぐ下に堆積している層は、ビルを建設する際に掘り返されて本来の状態を失った層である。



川第1層．黄灰色粗砂
川第2－a層．淡灰色極細砂
川第2－b層．黒灰色シルト質細砂
川第2－C層．暗灰色砂
川第2－d層．灰色混礫砂
川第2－e層．灰色極細砂
川第2－f層．淡灰色細砂
川第3－a層．明褐色粘質砂
川第3－b層.褐色粘質砂
川第3－c層.暗褐色粘質細砂
川第4層．明灰黄色砂礫
（川内第1～第4層中世土器を含む）
第1層．褐色細砂（第1遺構面）
第2層．黄褐色細砂
第3層．褐色粘質砂
第4層．褐色砂礫
（第2層～第４層＝無遺物層）
第5層．明褐色砂
（第5層＝地山層）

図1　調査地内地層の堆積状

第2節　河川跡

河川跡の発見

標高19.30m付近まで掘り下げたところでまず現れたのは、大きな川の痕跡だった。河川跡は、調査地内を北西から南東の方向に縦断する状態で見つかった。川の幅は5m程度、深さは60cm前後とやや浅い。調査地のほぼ中心を河川跡がつらぬき、その東西に川岸の一部が見えていた。

川はすでに自らの流れが運んだ土砂によって埋没していたため、色の違う土の帯が斜めに調査地を横切っているようにみえた。川の中の土砂を掘って、堆積の状態を観察すると、図3に示したように、大きくは5種類に分けられる、異なる層の重なりであることがわかった。

川の中の堆積物

川底に堆積しているのは、粗い砂粒が基層（地層を構成する中心の物質）となる砂礫層である（河川内第3層）。この層の中には、人の拳ほどの大きさの石や、人の頭くらいの大きな石も多く混じっている。一般に川砂のなかに混ざっている石の大きさは、流れの速度を反映するものと考えられる。川砂の粒が粗いほうが流れは速く、細かければ流れの速度は緩やかである。

川底に堆積した層の中にはかなり大きな石が多く混ざっていたことからみて、ある時かなり強い勢いの鉄砲水のような流れが、一瞬で押し寄せてきたと考えられる。川底の粗い砂礫層の上、下から二番目に堆積しているのは、底の層と正反対に細かい砂の層だった。（河川内第2層）。これはあるときあっという間に鉄砲水が押し寄せたが、その急流がおさまった後は、緩やかな川の流れが一定期間続いた可能性が高いことを示している。

その後も再びその上に粗い砂の堆積（河川内第1層）、そしてその上にまた細かい砂（河川内第4層）といったように、川の中には粗い砂と細かい砂が二度繰り返して交互に堆積していた。

急流の繰り返し

これらの堆積の様子からは、どんな風に川が流れていたかを知ることができる。まず鉄砲水が押し寄せたあと、しばらく流れが緩やかな時期を経て、ふたたびあるとき急流が押し寄せ、また緩やかな流れの期間があった。そして最終的には、川は自らの流れが運んだ土砂の沖積作用によって完全に埋没してしまい、川ではなくなったのだ。

川の中の土器

川の中に堆積していたのは、川の流れが運んだ土砂である。この中には、多量の土器が混じっていた。

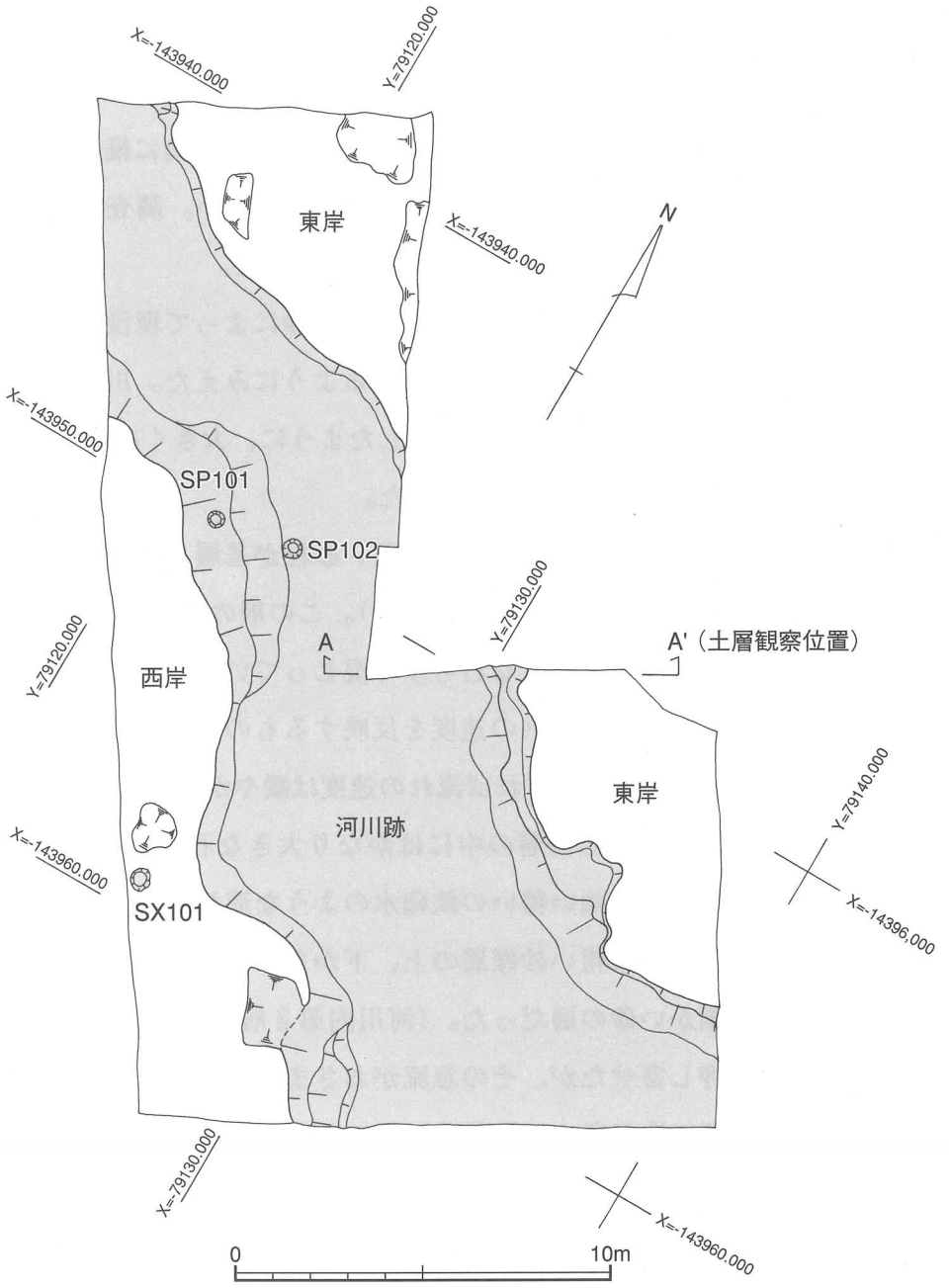


図2　河川跡（第1遺構面）平面図

標高19.50m地点付近まで掘り下げると現れた、かつての河川跡の地形。L字型の調調査地を縦断するように、北西から南東へむかって川は流れていた。

川の左右には、川岸が一部だが確認できた。これは川が流れていた当時の地面だが、そこに残されていた遺構はごくわずかだった。

川の中には、川の流れが運んだ土砂が堆積していたが、その土砂の中からは多量の土器が出土した。このことから、川の上流には当時の集落があったと考えられる。

川の中から出土した土器を整理して観察してみると、川の一番上に堆積した層からも、川底に堆積していた層からも、同じような土器が出土していると判明した。

これらの土器は、28リットル入る大きさのプラスチックコンテナに、全部で約12箱分出土したが、一番上の層にも一番下の層にも、同じ時代の土器が混ざっていることから考えて、この場所に川が発生してから埋没してなくなるまでに要した時間は比較的短時間だったと思われる。

川岸の風景

ところで川の左右で川岸が一部確認されているが、これは川が流れていた当時の地面である。川の中に多くの土器が埋まっていたことから考えても、この土器を使っていた人々の住んでいる集落が近くにあることは間違いない。しかし今回調査できた範囲では、岸に残されていた人間の生活痕は、非常に浅い丸いくぼみ（SX101と番号をつけた）が1ケ所だけであった。

川の西岸で見つかったこのくぼみは直径が約50cmの丸い形をしており、深さは約3cmしかない。この遺構の中には、ごく小さい土器の破片が混じった土が溜まっていたが、破片が小さすぎてどんな性質の土器であるかは不明である。

この遺構については、形状や中に溜まっていた土の状態から見て、人為的に造られたものと考えられるが、ひょっとしたら川のある層より新しい、もっと上の地層に造られた遺構が、削られてなくなったため、その底の部分だけが実際より浅くなって残っている可能性も考えられる。この遺構についての正確なことは不明である。これ以外の遺構としては、川の底にも2ケ所、直径が50cmほどの穴が発見された。

これらの穴は、発見されたときの状態から、川よりも古い時期のものだと考えられるが、中から何も出土しなかったため、いつのものか正確なことはわからない。

今回発見された川の面積は、第2次調査地の約80%を占める広さである。そのため川があった当時の人間が生活していた領域である陸地はごく一部、川の岸辺しか確認できなかった。

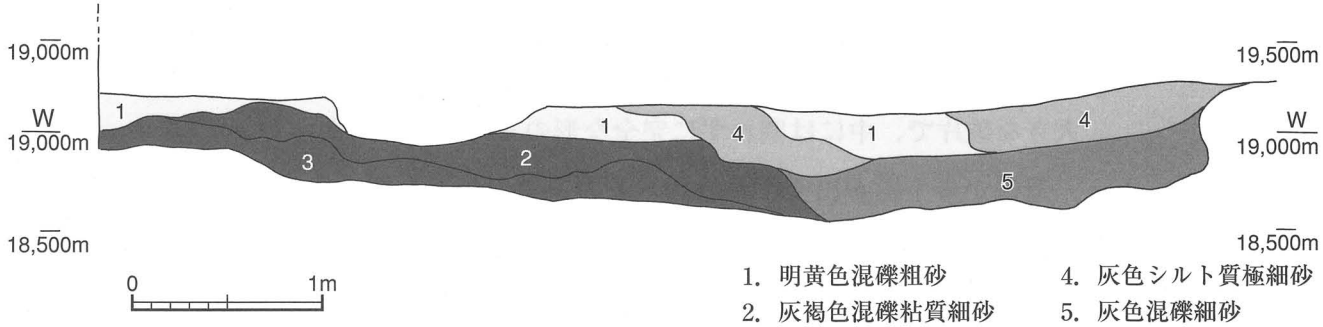


図3　河川内堆積層の状態

第3節　用水路跡

川より古い時代

川ができる以前のこの場所はどんな様子だったのだろう。それを知る手がかりも、ごくわずかだが得ることができた。

川が流れていた場所に関しては、川の流れがそれ以前にあった地層をすべて押し流していた。そのため川の堆積物を取り除くと、川底には地山の層が露呈する状態で何も残されていなかった。このため川が流れる以前に何があったかを知る手がかりはほとんどなかった。

一方ごくわずかに川岸として本来の地層が残った、調査地の北端と南端だけは、川岸の層から下に1層ないしは3層程度(場所によって若干異なる）の堆積があった。その下は川底と同じ地山層である。

本来は調査区全体に、この川岸で観察されたような古い時代の層が、川の層より下に堆積していたのだが、ある時川が流れたことによって、古い地層が残ったのは川岸のごく一部になってしまったと考えられる。

古い地層が生き残った調査区の南の瑞では、川岸の層（川が流れていた当時の地面の層）から下に約20cm掘り下げた標高18．80mの地点で、黄灰色のシルト質の地山層が存在し、そこに川の流れていた時代より古い時代の遺構が残されていた。

古代の用水路

見つかったのは、用水路として使われていたと考えられる、人工の溝状施設の一部である（便宜上SD201と番号をつけた)。

この溝は、調査地の長辺とほぼ平行する角度で南北に伸びているもので、深さは約40cmである。大部分が後の時代の川に削り取られてなくなってしまったため、本来の溝幅がどれほどあったのかはわからない。残っていたのは用水路の西半分、約2m幅の分で、実際にこの溝が使われていた当時の幅や長さは、それ以上あったと考えられるが正確なことはわからない。川に削られずに残っていた長さは約6．5mである。

用水路内の堆積層

溝の中には、黒い粘土が厚く堆積していたが、この土の中には多くの土器の破片が混じっていた。溝から出土したこれらの土器は、ほとんどが破片だがどれも大きな破片で、中には割れずに完全な形のままのものもあった。

遺構から土器が出土する場合、その遺構が使われていた当時に、使用していた人間が意識的にその場所に置いた（捨てた場合も含めて）ものである可能性と、遺構が使われなくなった後に、遺構の中に周囲の土やごみなどが自然に流入したもののどちらかだと考えられる。

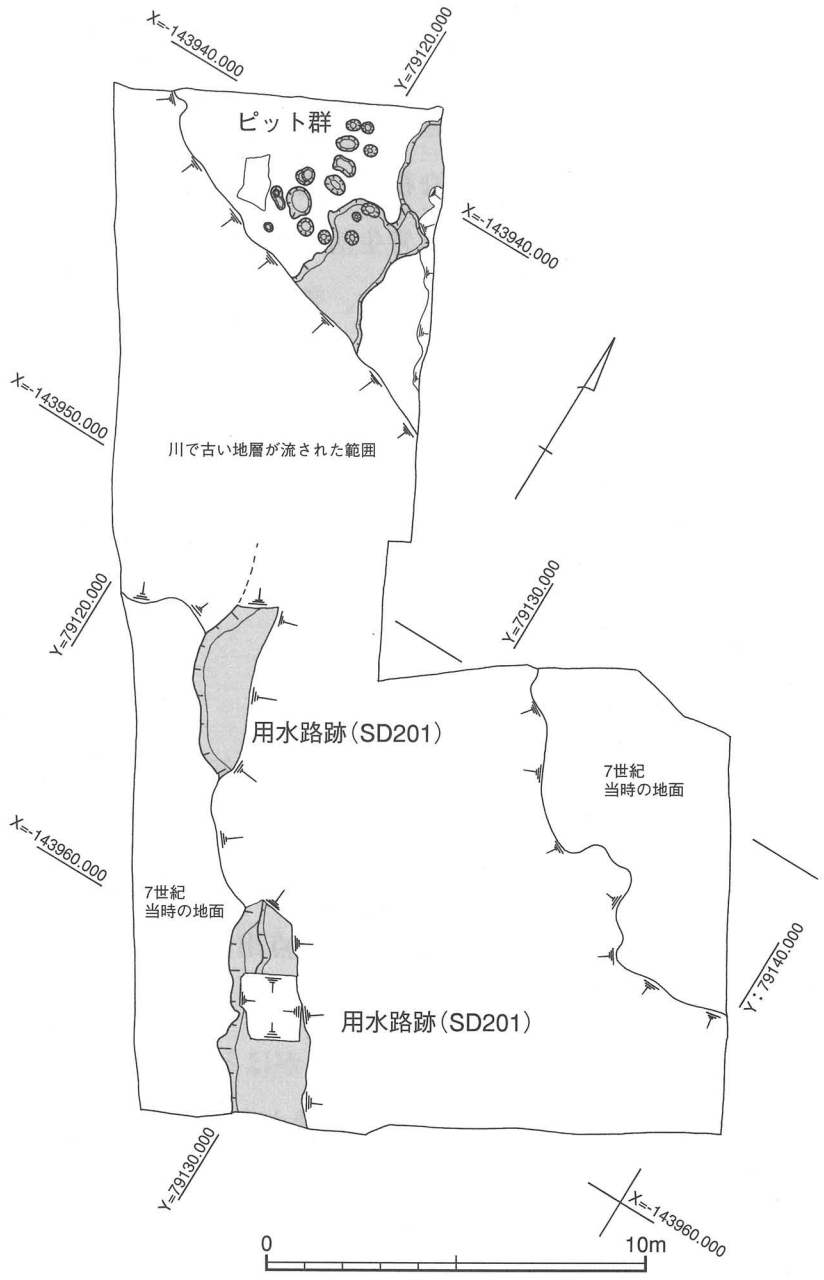


図4　用水路跡（第2遺構面）平面図

川の地層より下の層で、用水跡と考えられる遺構を発見した。しかし後の時代に川ができたときに、地層の大部分は流されてしまったおり、川に流されずに残っていたのはごくわずかだった。

用水路以外にも調査区の北側で、小さな穴（ピット）をいくつも発見したが、これらの遺構については、いつのものか不明だった。

今回溝の中から出土した多量の土器は、出土状況や個々の土器の残り具合からみて、前者であると考えられる。

投げ込まれた？土器

といっても、土器が出土したときの状態は、安置したというには程遠い不規則なものである。おそらく用水路的な役割の遺構と考えられるので、中に残っていたこれらの土器も、集落の住人が日常生活において、溝に廃棄したものではないかと考えられる。溝からは、動物の歯や、帯金具（ベルト金具）なども出土しており、日常的に人々は溝内にいろんなごみを投げ込んでいたのではないだろうか。

溝の底には人の拳ほどの大きさの石が多く溜まっていた。取り立てて規則的に配置しているわけではないこれらの石は、おそらく溝に投棄されたものか偶然溝の中に落ち込んだものが底にたまったものではないかと思われる。

第4節　時期不明のピット群

ところで用水路が残されていた南端以外に、北端にもその対岸だった古い地層が残っていた。川岸の層を取り除くと、淡黄色の粗い砂層の地山層が現れるのだが、その過程でごく少量の弥生土器片と、石器を製作する時にできたとみられる、サヌカイトという石材のチップ状の破片が数点出土している。地山層上には、15ケ所の遺構が残されているのが確認された。

ピットの時期

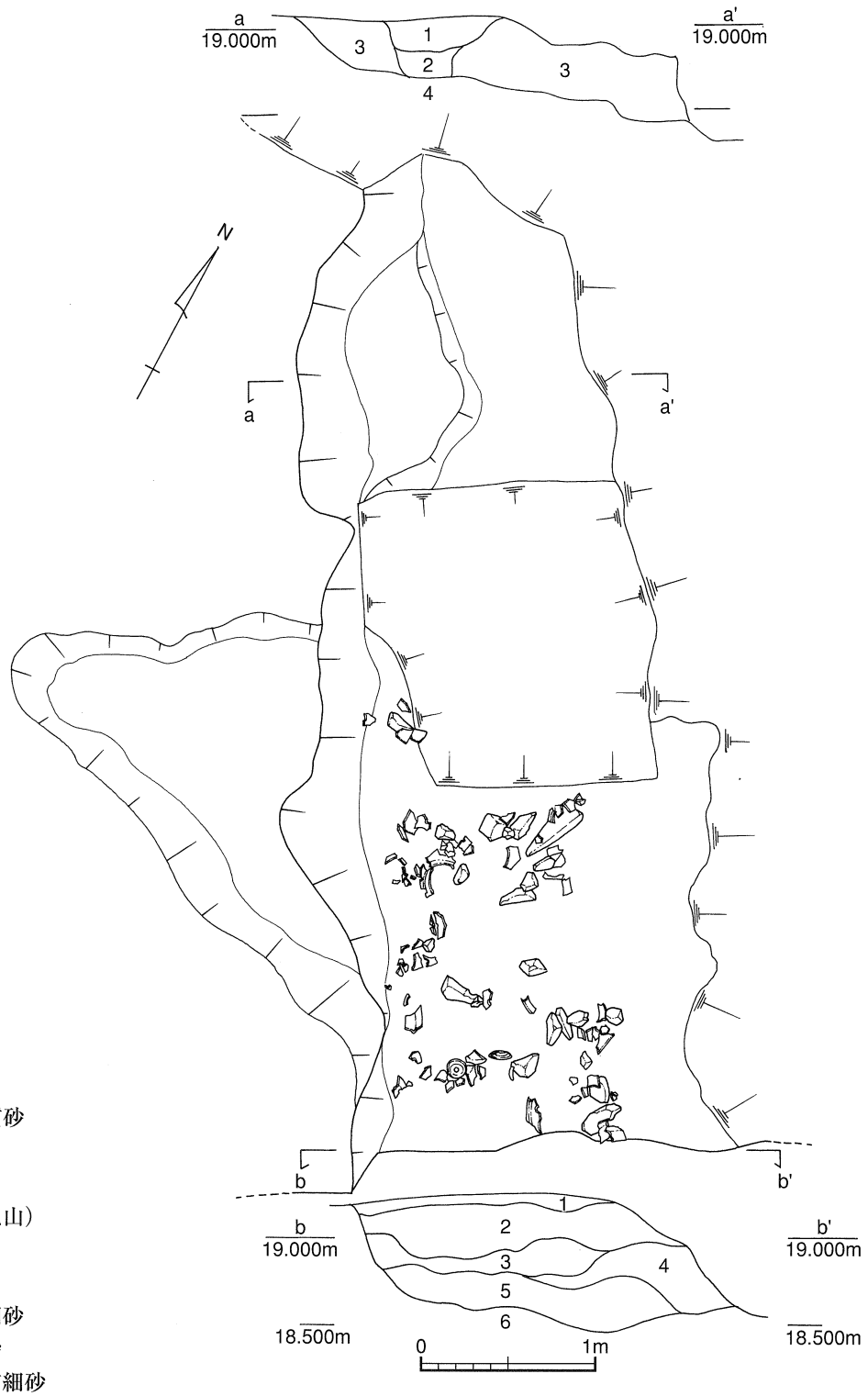
発見された遺構は丸い小さな穴（ピット）がほとんどで、楕円形のものもある。これらは40～60cmの深さで、直径は40cm前後が多く、そのほかのものもある。これらの遺構に共通しているのは、中に堆積していた灰褐色の砂と、まったく遺物が出土しなかったという点である。

ピットの機能

互いに何か関係があるのかもしれないが、配置は不規則で、位置関係から遺構の機能を読み取ることはできなかった。南側の溝とちがって遺物が出土しないため、いつ造られたものかもわからない。川の地層より下の層で発見されていることから、それより古いことは間違いない。

ごくわずかに遺構の上に堆積していた層から石器石材などが出土している点から、弥生時代の可能性も考えられるが、だとしたら、南側の溝とは全く別物の遺跡の一部だということになる。得られた情報量が少なすぎるため、北側の遺構については正確には判定できない。北の時代不明の遺構と南の用水路跡は、どちらも後の時代に川が流れていた時は、すでに新しい層が上に堆積して、地下に埋もれていたようだが、二つの遺構の時期は異なる可能性が高い。

用水路とピット群の関係



a－a‘断面
1．灰色シルト質砂
2．褐灰色砂
3．灰色混礫砂
4．褐色砂礫（地山）

b－b′断面
1．明褐色粘質細砂
2．褐色粘質細砂
3．時灰褐色粘質細砂
4．灰褐色混礫粘質細砂
5．暗灰色砂礫
6．黄灰色シルト質細砂
（地山）

図5　用水路跡　平・断面図

なぜ用水路と同じ時代の遺構は、今回の調査地の北側で発見されなかったのだろうか？もし北にも南にも同じように人間が活動していたのなら、同じように遺構が残されるのではないだろうか？それについては、今回の調査区の西南角部分が、用水路を使っていた当時のムラの、一番端にあたり、同じ調査区内の北や東側までは広がっていなかったのではないかという可能性が考えられる。

人間が生活している範囲では、人間の出す有機物の混じった土が堆積しやすいが、今回そのような痕跡は北端では発見できなかった。また、L字形に掘られた今回の調査区の東側にも、一部川で流されずに川岸になっていた部分を確認している（図３）が、この場所でも地層の堆積は基本的には北端とほぼ同質だった。

ここも川が流れていた当時の地面の層からは遺物も出土せず、その下層では地山層である淡黄色の粗砂層が確認された。

図6　調査地北端（第2遺構面）平面図

第3章　遺物

第1節 用水路跡出土の遺物

出土遺物の内訳

今回の発掘調査では、川の痕跡と用水路跡という、二つの異なる時期の遺構を発見したが、これらの遺構からは土器や金属製品などの遺物が、28リットル容量のプラスチックコンテナに約11箱分出土した。出土遺物の大半は河川跡からのもので、ほとんどすべてが土器である。土器以外の出土品はごくわずかで、川から出土した銅銭が3点と、用水路跡から出土した帯金具と獣歯の破片などである。

これらの遺物については、現地での発掘調査終了後、神戸市西区にある神戸市埋蔵文化財センターにおいて、整理および調査作業が行われた。

出土品の調査

作業は、長い間土に埋もれていたため土器に付着した土を、水洗いしてクリーニングした後、出土層ごとに分類し、破片同士が接合するかを確認する。その後接合すると判明したものについては、接着剤と石膏を用いて、もとの形に復元する。

さらに、これらの中から、保存状態のよい物を選び出して、図化および観察作業と写真撮影作業を行うという手順であった。

本章では、このようにして復元された土器の実測図と、計測値、特徴などの観察結果を列記しておく。

前章で述べたように、土器には、使われていた時代ごとに形に特徴がある。考古学研究者にとってこのような数値的データや土器の特徴は重要である。それらの資料をもとに土器の使われていた年代を割り出したり、地域的な特徴や特異な点などがないか調べる手掛かりとするからである。

本章については、やや専門的な内容に傾いてしまうため、一般には退屈な内容となるかもしれない。その場合は、本章の結論部分だけを拾い読みしていただければ十分である。

a. 用水路跡出土の土器

調査地の南端で発見された用水路跡からは、図7に示したような土器が出土した。

1は、須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で、口径は14.0cm、残存部高は3.9cmを測る。天井部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

2は、須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で、口径は11.5cm、残存部高は3.0cmを測る。天井部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

3は、須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で、口径は12.0cm、残存部高は3.5cmを測る。天井部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

4は、須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で、口径は11.6cm、残存部高は3.5cmを測る。天井部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

5は、須恵器の蓋である。宝珠つまみのつく小型のタイプで、口径は9.0cm、器高は3.0cmを測る。天井部はヘラ削りで整形した後、ナデで調整している。

6は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は10.0cm、残存部高は2.5cmを測る。底部付近はヘラ削りで整形した後、ナデで調整している。

7は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は11.4cm、残存部高は3.0cmを測る。底部付近はヘラ削りで整形した後、ナデで調整している。

8は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は13.0cm、残存部高は3.8cmを測る。底部付近はヘラ削りで整形した後、ナデで調整している。

9は須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で、口径は18.5cm、残存部高は4.3cmを測る。天井部付近はヘラ削りで整形した後、ナデで調整している。

10は土師器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は17.0cm、残存部高は4.0cmを測る。内面底部付近はヘラ磨きで、内面口縁から外面全体にかけてはナデで調整している。

11は土師器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は12.0cm、残存部高は3.9cmを測る。内面には暗文を施し、外面底部付近は指頭圧痕が観察できる。内面口縁から外面全体にかけてはナデで調整している。

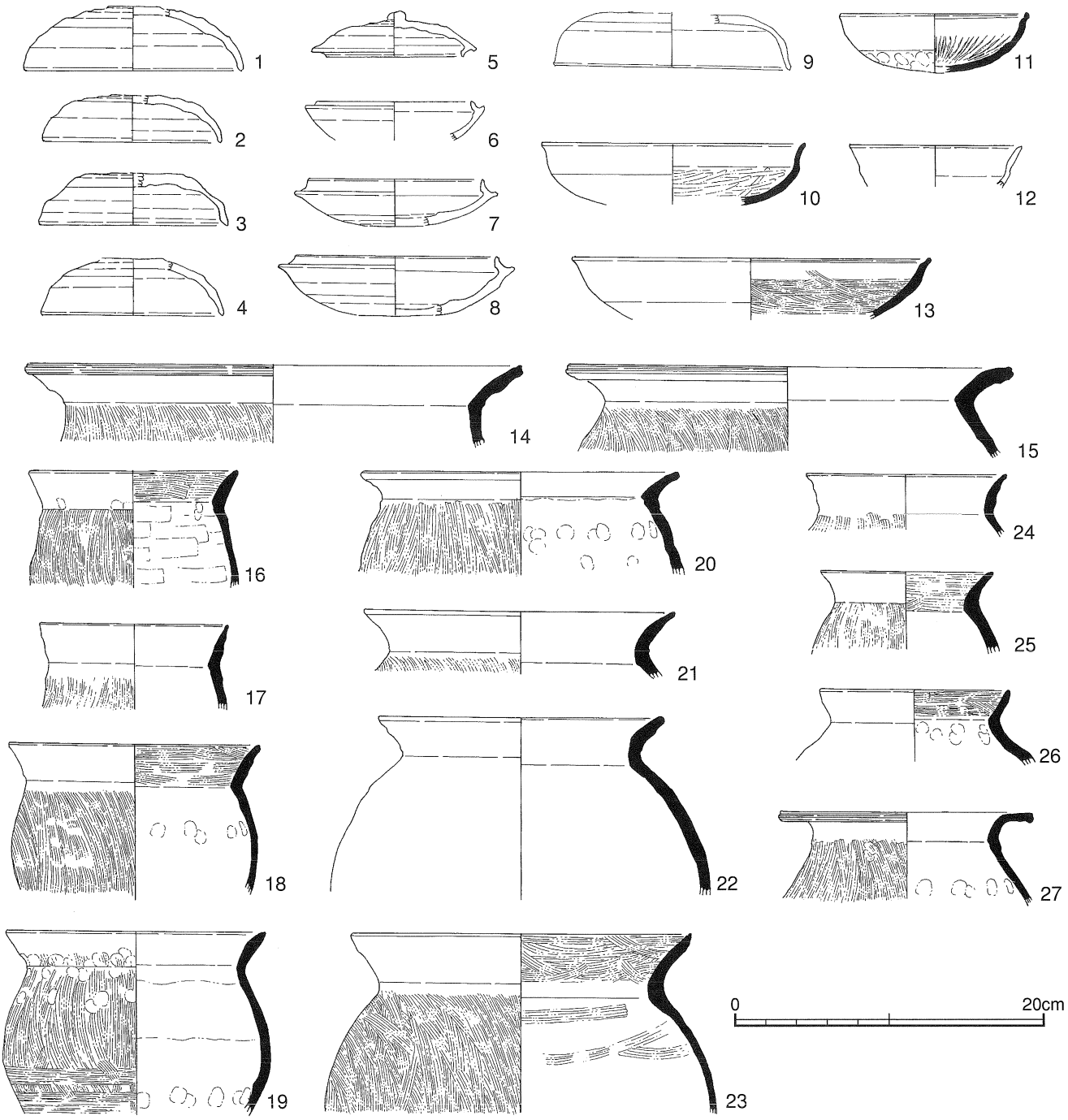
12は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は11.2cm、残存部高は2.8cmを測る。内外面全体にかけてはナデで調整している。

13は土師器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は23.2cm、残存部高は4.0cmを測る。内面底部付近はハケで、内面口縁から外面全体にかけてはナデで調整している。

14は土師器の甕である。口縁部から頸部にかけての破片で、口径は32.0cm、残存部高は5.1cmを測る。

くの字型に外反する口縁だが、口径が体部径より大きい器形である。口縁付近は摩滅が著しく調整は不明だが、外面頸部以下はハケで調整している。

15は土師器の甕である。口縁部から頸部にかけての破片で、口径は28.7cm、残存部高は5.6cmを測る。



1～5．須恵器　蓋　　6～8．須恵器　坏　9.須恵器　坏　10．11.土師器　坏
12.須恵器　坏　13.土師器　坏　14～27．　土師器　甕

図7　用水路跡（SD201）出土土器　実測図

くの字型に外反する口縁だが、体部径が口径より大きい器形である。口縁付近は内外面ともにナデで、外面頸部以下はハケで調整している。

16は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は13.4cm、残存部高は7.6cmを測る。やや長めのくの字型に外反する口縁で、口縁中ほどが肥厚なタイプである。口径が体部径より大きい。口縁内面はハケで、外面はナデで調整している。頸部に指頭圧痕が複数認められる。外面頸部以下はハケで、内面はヘラ押さえののちナデて調整している。

17は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は12.0cm、残存部高は5.6cmを測る。やや長めのくの字型に外反する口縁で、口縁中ほどが肥厚なタイプである。口径が体部径よりわずかに大きい。口縁外面は摩滅が著しく、調整は不明である。外面頸部以下はハケで調整している。

18は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は16.2cm、残存部高は9.8cmを測る。やや長めのくの字型に外反する口縁で、口縁中ほどが肥厚なタイプである。口径が体部径より大きい。口縁内面はハケで、外面はナデで調整している。体部内面に指頭圧痕が複数認められる。外面頸部以下はハケで、内面はナデて調整している。

19は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は16.7cm、残存部高は12.0cmを測る。口縁中ほどが肥厚なタイプである。口径が体部径より大きい。口縁内外面はナデで調整している。頸部と腹部に指頭圧痕が複数認められる。外面頸部以下はハケで、内面はナデて調整している。

20は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は20.4cm、残存部高は6.6cmを測る。くの字型に外反する口縁で、口径が体部径より大きい。口縁内外面はナデで調整している。腹部内面に指頭圧痕が複数認められる。外面頸部以下はハケで、内面はナデて調整している。

21は土師器の甕である。口縁部から頸部にかけての破片で、口径は20.1cm、残存部高は4.3cmを測る。口縁内外面はナデで調整している。外面頸部以下はハケで、内面はナデて調整している。

22は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は18.3cm、残存部高は11.5cmを測る。全体に摩滅が著しいため、調整は不明である。

23は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は22.0cm、残存部高は11.6cmを測る。体部径が口径より大きい。

口縁内面はハケで、外面はナデで調整している。外面頸部以下はハケで、内面もわずかにハケで調整しているのが観察できる。

24は土師器の甕である。口縁部から頸部にかけての破片で、口径は12.8cm、残存部高は4.1cmを測る。口縁内外面はナデで調整している。外面頸部以下はハケで、内面はナデて調整している。

25は土師器の甕である。口縁部から腹部にかけての破片で、口径は11.1cm、残存部高は5.3cmを測る。口縁内面はハケで、外面はナデで調整している。頸部以下外面はハケで、内面はナデて調整している。

26は土師器の甕である。口縁部から頸部にかけての破片で、口径は12.2cm、残存部高は4.8cmを測る。体部径が口径より大きい。

口縁内面はハケで、外面はナデで調整している。頸部内面に指頭圧痕が複数認められる。頸部以下は、内外面ともナデて調整している。

27は土師器の甕である。口縁部から頸部にかけての破片で、口径は16.2cm、残存部高は6.1cmを測る。

大きく外反し、面をなす口縁である。口縁は内外面ともにナデで調整している。腹部内面に指頭圧痕が複数認められる。外面頸部以下はハケを施し、内面はナデて調整している。

b. 遺物の時期

用水路跡出土の土器の時期

以上が用水路跡から出土した土器の概要である。出土した土器を器種ごとに分類してみると、須恵器の坏、蓋、土師器の坏、そして土師器の甕とごく日常的なものばかりである。

これらの出土品はいずれも飛鳥時代の特徴を備えたものであるが、個々の土器をもう少し詳しく見てみると、11の土師器の坏は、専門家の間では「金属器写し、暗文を有する」と呼ばれる典型的な土器である。

また5の須恵器蓋も小型のその器形は、この時代に特徴的なものである。今回土師器の甕が多く出土しているが、体部外面や口縁内面をハケで調整するという、一定のパターンでつくられているところもこの時代の土器によく見られる。

これらは研究者の間では「飛鳥Ⅰ式」と呼ばれる土器で、西暦600年を少し過ぎたころに作られたものと考えられている。

用水路跡の時期

このような土器がまとまって出土したことから考えて、用水路が使われていたのは、今から1400年前の、飛鳥時代のことであろうと考えられる。

第2節　河川跡出土の土器

今回の調査地の総面積の約80%を占める広さで発見された、河川跡から出土した土器について詳述する。河川跡からの出土土器についても、7世紀の用水路からの出土品と同じく、保存状態のよい物を選び出して、図化および観察作業と写真撮影作業を行った。川からの出土遺物もほとんどすべてが土器片であったが、ごくわずかに銅銭がなど金属製品が、土器とともに出土している。出土品のうち、少し珍しいものとしては、蛸壺があげられる。

a. 河川内第5層出土の土器

28は土師質の蛸壺である。口径は13.0cm、器高は25.8cmを測る。全体に手づくねで整形されており、無数の指頭圧痕が残る。また、指なでの跡も内外面ともに観察できる。竹管文が3箇所外面に記されているが、用途は不明である。

29は、須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で、口径は13.8cm、残存部高は3.8cmを測る。天井部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

30は、須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、口径は13.8cm、残存部高は3.8cmを測る。底部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

31は、須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で、口径は14.0cm、残存部高は3.0cmを測る。天井部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

32は、須恵器の坏である。口径は11.5cm、残存部高は4.3cmを測る。底部をヘラ削りで整形した後、全体にナデで調整している。

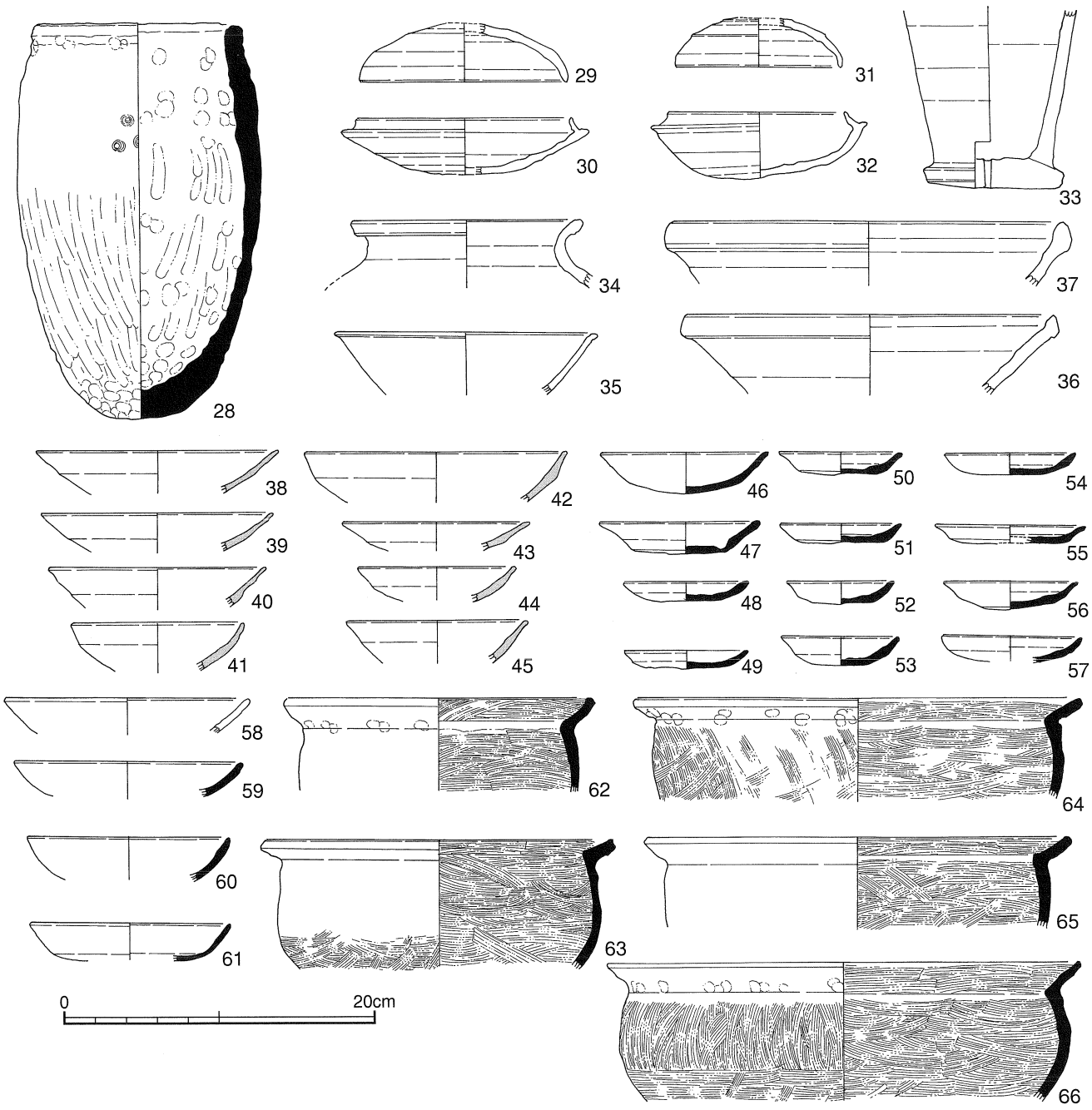
33は須恵器の鉢である。底部のみの破片で、底部径は8.0cm、残存部高は11.6cmを測る。底部に穿孔が施されている。全体をナデで調整している。

34は須恵器の壺である。口縁部のみの破片で、口径は14.8cm、残存部高は4.5cmを測る。口縁部は内外面ともナデているが、外面頸部以下にはタタキを施す。

35は白磁の埦である。復元口径は17.0cm、残存部高は4.2cmを測る。

36は須恵器の鉢である。底部が欠損した破片で、口径は25.0cm、残存部高は4.1cmを測る。丸みのない直線的な器形で、口縁口縁端部は上下方向にわずかに肥厚する。内外面ともナデて調整している。

37は須恵器の鉢である。底部が欠損した破片で、口径は23.8cm、残存部高は5.2cmを測る。丸みのない直線的な器形で、口縁端部は上下方向にわずかに肥厚する。内外面ともナデて調整している



28. 土師質　蛸壺　29.31.須恵器　蓋　30.32須恵器　坏　33.須恵器　鉢　34.須恵器　甕
35.白磁埦　36.37.須恵器　鉢　38～45.瓦器　埦　46～49.土師器　皿　50～52.須恵器　皿
53～56.瓦器　皿　57.土師器　皿　58.須恵器　埦　59～61.土師器　皿　62～66.土師器　鍋

図8　河川内第5層出土土器　実測図

38は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は15.6cm、残存部高は2.8cmを測る。わずかに内湾するが、口縁はほとんど直線に近く、浅く低い器形である。口縁端部は丸く収まる。内面に連続する長楕円の暗文を有するが、破片のため、正確な形状は不明である。

39は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は15.0cm、残存部高は2.5cmを測る。わずかに内湾するがほとんど直線に近く、浅く低い器形である。口縁端部は丸く収まる。内面に連続する長楕円の暗文を有するが、破片のため、正確な形状は不明である。

40は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は14.0cm、残存部高は2.7cmを測る。わずかに内湾するが、口縁はほとんど直線に近く、浅く低い器形である。口縁端部は丸く収まる。内面に連続する長楕円の暗文を有するが、破片のため、正確な形状は不明である。

41は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は15.0cm、残存部高は2.5cmを測る。内湾する器形で、口縁口縁端部は丸く収まる。内面に暗文を有するが、破片のため正確な形状は不明である。

42は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は16.8cm、残存部高は3.3cmを測る。内湾する器形で、口縁端部は丸く収まる。内面に暗文を有するが、破片のため、正確な形状は不明である。

43は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は12.2cm、残存部高は1.9cmを測る。わずかに内湾するが、口縁はほとんど直線に近く、浅く低い器形である。口縁端部は丸く収まる。内面に連続する長楕円の暗文を有するが、破片のため、正確な形状は不明である。

44は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は10.1cm、残存部高は2.2cmを測る。内湾する器形で、口縁端部は丸く収まる。

45は瓦器の埦である。底部が欠損した破片で、口径は11.8cm、残存部高は2.8cmを測る。口縁はほとんど直線に近く、浅く低い器形である。口縁端部は丸く収まる。内面に連続する長楕円の暗文を有するが、破片のため、正確な形状は不明である。

46は土師器の皿である。口径は10.6cm、器高は2.7cmを測る。内湾する器形で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

47は土師器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は9.6cm、器高は2.1cmを測る。口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、下半をユビオサエで調整している。内面もナデで調整している。

48は土師器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は7.8cm、残存部高は1.3cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

49は土師器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は7.9cm、残存部高は1.2cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

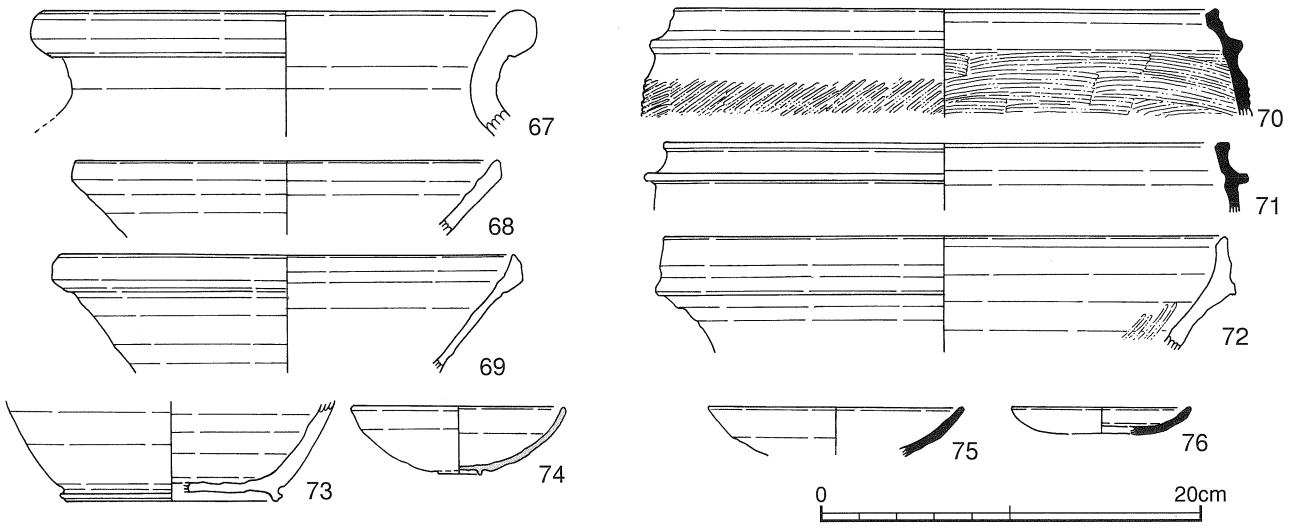
50は須恵器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は8.0cm、残存部高は1.5cmを測る。外反する口縁で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、底部をユビオサエで調整している。内面もナデで調整している。

51は須恵器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は7.8cm、残存高は1.2cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

52は須恵器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は6.8cm、残存高は1.5cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

53は瓦器の皿である。口径は7.6cm、残存部高は1.9cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。

54は瓦器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は8.4cm、残存部高は1.5cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。



67.須恵器　甕　68.69.須恵器　鉢　70.71土師器　釜
72.備前焼　鉢　73. 須恵器　坏　74.瓦器　埦　75.76.土師器　皿

図9　河川内第4層出土土器　実測図

55は瓦器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、底部の欠損した破片である。口径は8.4cm、残存部高は1.5cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。

56は瓦器の皿である。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、口径は8.6cm、残存部高は1.8cmを測る。外反する口縁で、口縁端部は丸く収まる。

57は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は8.8cm、残存部高は1.7cmを測る。内湾する口縁で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

58は須恵器の埦である。底部の欠損した破片で、口径は15.8cm、残存部高は2.2cmを測る。直線的な口縁で、口縁端部は丸く収まり、浅い器形である。内外面ともナデで調整している。

59は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は14.7cm、残存部高は2.3cmを測る。わずかに体部が内湾する器形で、口縁端部は丸く収まり、浅い器形である。内外面ともナデで調整している。

60は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は13.0cm、残存部高は2.8cmを測る。体部が内湾する器形で、口縁端部は丸く収まる。内外面ともナデで調整している。

61は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は12.8cm、残存部高は2.4cmを測る。体部が外反する器形で、口縁端部は丸く収まり、浅い器形である。内外面ともナデで調整している。

62は土師器の鍋である。受け口状に内湾する口縁で、口縁端部は面をなす。

口径は19.8cm、残存部高は6.1cmを測る。口縁部外面はナデで、内面はハケで調整している。頸部外面に指頭圧痕が複数確認できる。

体部は外面はナデで、内面は細かいハケで調整している。

63は土師器の鍋である。断面がL字型の直線的な口縁で、口縁端部は面をなす。口径は22.5cm、残存部高は8.3cmを測る。

口縁部外面はナデで、内面はハケで調整している。体部外面はナデだが、底部付近にはハケが確認できる。内面は全体にハケを施す。

64は土師器の鍋である。断面がL字型の直線的な口縁で、口縁端部は面をなす。口径は28.8cm、残存部高は6.7cmを測る。口縁部外面はナデで、内面はハケで調整している。頸部外面に指頭圧痕が複数確認できる。体部は内外面とも細かいハケで調整している。

65は土師器の鍋である。受け口状に内湾する口縁で、口縁端部は面をなす。口径は27.2cm、残存部高は6.0cmを測る。口縁部外面はナデで、内面はハケで調整している。体部外面はナデで、内面は全体にハケを施す。

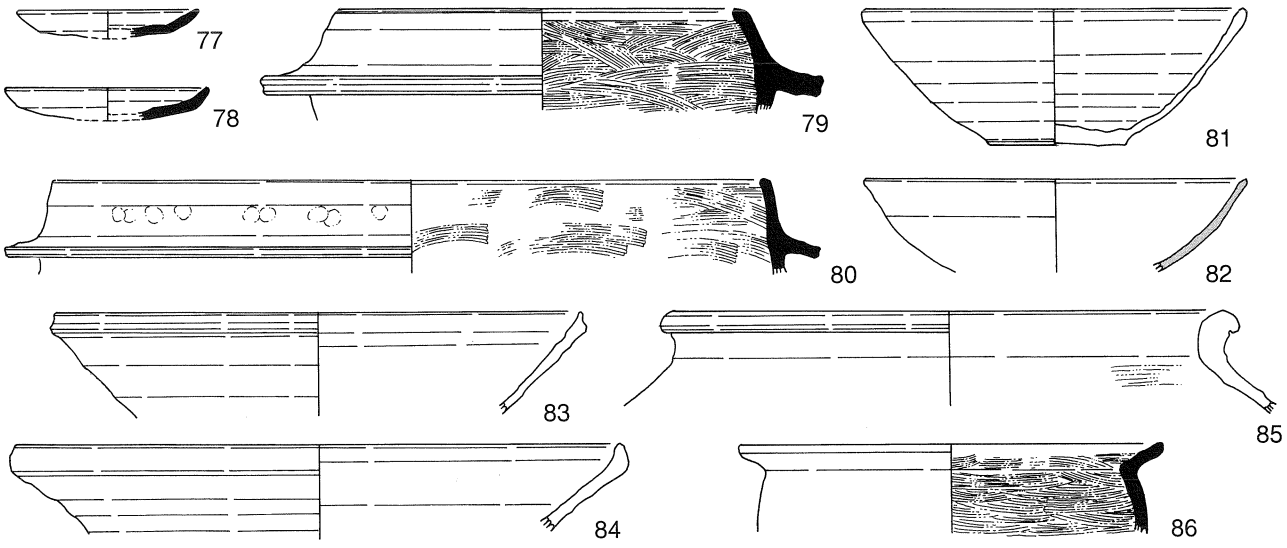
66は土師器の鍋である。断面がL字型の直線的な口縁端部は面をなす。口径は30.4cm、残存部高は9.0cmを測る。口縁外面はナデで、内面はハケで調整している。頸部外面に指頭圧痕が複数確認できる。体部は内外面とも細かいハケで調整している。

d．河川内第4層出土の土器

67は須恵器の甕である。口縁部分の破片で、口径は25.3cm残存部高は6.7cmを測る。端部を折り曲げて作っており、内外面とも全体にナデで調整している。

68は須恵器の鉢である。底部が欠損した破片で、口径は22.3cm、残存部高は4.0cmを測る。丸みのない直線的な器形で、口縁端部は器壁に対し、垂直に近く、肥厚化はしていない。内外面ともナデて調整している。

69は須恵器の鉢である。底部が欠損した破片で、口径は24.0cm、残存部高は6.4cmを測る。丸みのない直線的な器形で、口縁端部は上下方向に肥厚する。内外面ともナデて調整している。



77.78.土師器　皿　79.80.土師器　釜　81.須恵器　埦
82.瓦器　埦　83.84.須恵器　鉢　85.須恵器　甕　86.土師器　鍋

図10　河川内第2層出土土器　実測図

70は土師器の釜である。底部が欠損した破片で、口径は28.8cm、残存部高は5.7cmを測る。口縁は内傾し、端部は面をなす。鍔は短い。口縁内外面はナデで調整している。体部外面はタタキを施し、内面はハケで調整している。

71は土師器の釜である。底部が欠損した破片で、口径は29.6cm、残存部高は3.7cmを測る。短い口縁は内傾し、端部は面をなす。鍔は短い。口縁内外面はナデで調整している。

72は備前焼のすり鉢である。底部が欠損した破片で、口径は29.6cm、残存部高は6.2cmを測る。口縁は発達し、端部は面をなす。内外面はナデで調整している。

73は須恵器の坏である。底部のみの破片で、底径は11.0cm、残存部高は5.3cmを測る。断面は方形の高台が、底部と体部の屈曲点近くに付く。内外面はナデで調整している。

74は瓦器の埦である。口径は10.2cm、器高は3.5cmを測る。内湾する器形で、断面が三角形の形骸化した高台が付く。口縁端部は丸くおさまる。

75は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は13.4cm、残存部高は2.5cmを測る。体部が内湾する、低く浅い器形である。口縁端部は丸く収まる。

76は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は9.4cm、残存部高は1.4cmを測る。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、体部が内湾する器形である。口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

c．河川内第2層出土の土器

77は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は9.6cm、残存部高は1.3cmを測る。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、体部が内湾する器形である。口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

78は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は10.6cm、残存部高は1.7cmを測る。底部と体部の境を屈曲させるタイプで、体部が内湾する器形である。口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

79は土師器の釜である。口縁部のみの破片で、口径は21.5cm、残存部高は5.5cmを測る。長い口縁部は内傾し、鍔部は下方に発達している。端部は面をなす。内面はハケで、外面はナデで調整している。

80は土師器の釜である。口縁部のみの破片で、口径は37.2cm、残存部高は5.1cmを測る。長い口縁部は直立し、鍔部は下方に発達している。端部は面をなす。内面はハケで、外面はナデで調整している。口縁部に指頭圧痕が複数認められる。

81は須恵器の埦である。口径は20.0cm、器高は7.3cmを測る。直線的な器形で見込み部はわずかに凹む。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともナデて調整している。

82は瓦器の埦である。口径は10.2cm、残存部高は3.5cmを測る。内湾する器形で、口縁端部は丸くおさまる。内外面ともミガキで調整している。

83は須恵器の鉢である。底部が欠損した破片で、口径は27.7cm、残存部高は5.5cmを測る。

丸みのない直線的な器形で、口縁端部は器壁に対し、垂直に近く、わずかに肥厚化している。内外面ともナデて調整している。

84は須恵器の鉢である。底部が欠損した破片で、口径は32.0cm、残存部高は4.6cmを測る。外反する器形で、口縁端部は上方に拡張し、肥厚化している。内外面ともナデて調整している。

85は須恵器の甕である。口縁部のみの破片で、口径は29.0cm、残存部高は5.0cmを測る。肥厚化した短い口縁端部を折り曲げて作っている。内面はナデて調整しており、外面はわずかだがタタキが認められる。

86は土師器の鍋である。底部が欠損した破片で、口径は22.2cm、残存部高は4.8cmを測る。口縁の断面はL状で直線的である。端部は面をなす。外面はナデて、内面はハケで調整している。

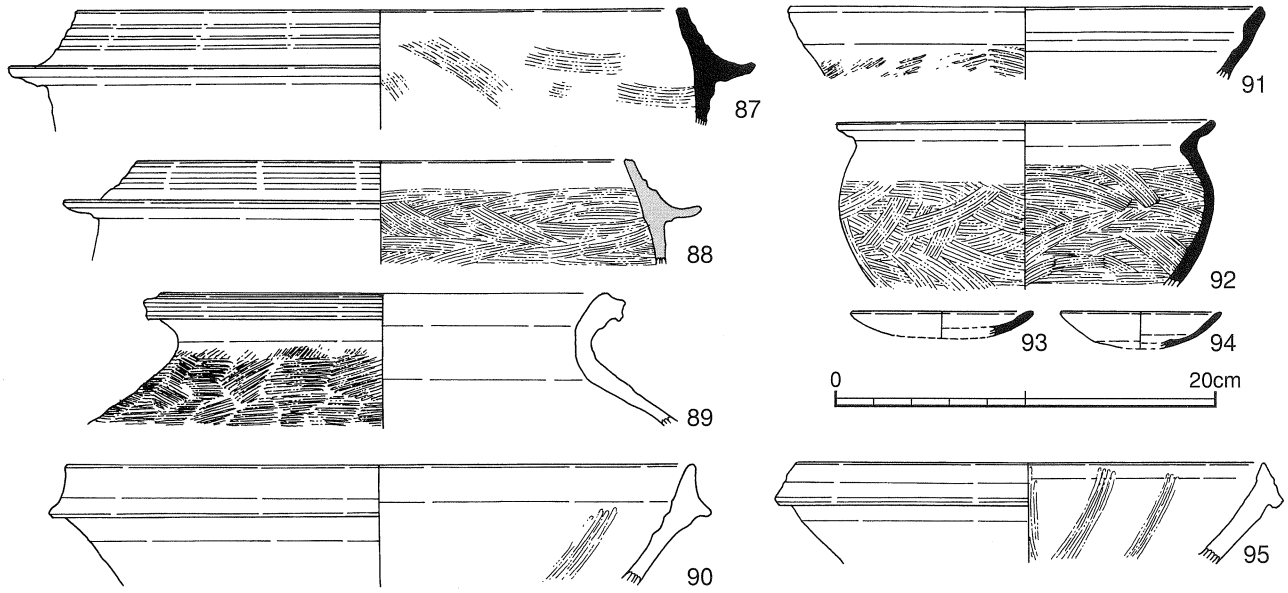
d．河川内第1層出土の土器

87は土師器の釜である。口縁部のみの破片で、口径は32.2cm、残存部高は6.3cmを測る。口縁は内傾しており、口縁断面は方形を呈する。鍔部は上方に向いてやや発達している。外面はナデで、内面は摩滅しているがハケで調整しているのが観察される。

88は瓦質の釜である。口縁部のみの破片で、口径は26.1cm、残存部高は5.3cmを測る。口縁は内傾しており、断面は方形を呈する。鍔部は上方に向いてやや発達している。外面はナデで、内面はハケで調整している。

89は須恵器の壺である。口縁部のみの破片で、口径は24.4cm、残存部高は7.2cmを測る。口縁端部は発達して面をなす。内面は全体にナデで、外面は口縁をナデで、頸部以下をタタキで調整している。

90は備前焼のすり鉢である。底部が欠損した破片で、口径は33.0cm、残存部高は6.4cmを測る。口縁は発達しており、端部は面をなす。内外面はナデで調整している。



87.土師器　釜　88.瓦質　釜　89.須恵器　甕　90.備前焼　鉢　91. 土師器　鉢
92.土師器　鍋　93.94.土師器　皿　95.備前焼　鉢

図11　河川内第１層出土土器　実測図

91は土師器の鉢である。口縁部のみの破片で、口径は25.0cm、残存部高は3.8cmを測る。内面はナデで調整しているが、外面は摩滅してはいるが、タタキの痕跡が観察される。

92は土師器の鍋である。底部が欠損した破片で、口径は19.8cm、残存部高は10.7cmを測る。口縁の断面はL状で、やや受け口状である。端部は面をなす。外面はナデて、内面はハケで調整している。

93は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は9.6cm、残存部高は1.3cmを測る。体部が内湾する器形で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

94は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は8.4cm、残存部高は1.9cmを測る。体部が内湾する器形で、口縁端部は丸く収まる。外面は上半部を一段ナデで、内面もナデで調整している。

95は備前焼のすり鉢である。底部が欠損した破片で、口径は24.6cm、残存部高は5.4cmを測る。直線的な器形で、端部は下方に拡張している。内外面はナデで調整している。

e．遺物の時期

土器の時間差

以上の土器を全体に概観してわかることは、川の中の上層から出土した土器にも、下層から出土した土器にも、形態的に差が見られないことである。つまり、川の中に堆積していた砂の層は、その性質や砂粒の細かさ、色調などから五つの層に分けられ、重なり方から堆積した順序も明確ではあるが、川が発生してから土砂で埋まって完全に埋没するのに要した時間は、さほど長くないということを示している。

混入品

29～33の土器については、用水路から出土したのと同じ、7世紀の土器である。これは、河川が形成される際に、もとからあった古い用水路を川が押し流した過程で、用水路内の堆積物が川の中に混じりこんだからであろう。

出土土器類の時期については、81の須恵器埦や、38～45、74の瓦器埦などの器形からみて、13世紀代であると考えられる。36、37、68、69、83の須恵器鉢は、いずれも直線的な器形と、やや拡張する傾向にある口縁端部をもつ。このような器形は東播系須恵器鉢としては、13世紀初頭の形態である。74の瓦器埦は、楠葉型と呼ばれるタイプで、高台断面が三角形の低いものである。このような形態のものは、13世紀前半から半ばにかけての時期のものであると考えられている。

瓦器椀の時期

一方38～40、43、75の瓦器埦については、74に比して器形が直線的で浅く、口縁端部は丸く、器壁は凹凸に富んでいる。このような形態は和泉型と呼ばれるタイプの特徴で、年代的にはやはり13世紀前半から半ばに該当すると考えられる。

今回出土した瓦器椀については、2つのことなる地域性をもったタイプが混在しているように思われる。備前焼のすり鉢も数点出土しているが、これらは口縁の形態から、14世紀前半のⅣ期に分類されると考えられる。

土師器釜の時期

土師器の釜については、内傾したやや長めの口縁形態から13世紀のものと考えられる。おなじく鍋についても、受け口状の口縁形態から、13世紀～14世紀と考えられる。写真図版22、24に示した灰釉、緑釉についても、高台の形状や施釉の状態などから、13世紀のものと考えられる。今回河川跡から出土した土器は、個々に見れば若干の時期差があるが、全体的にはその年代が、およそ13世紀～14世紀のどこかにおさまるものと思われる。

川の年代

川の底に堆積している層からも、一番上に堆積している層からも、土器が同じように混在して出土する状態から、この場所に河川が形成され、自らの流れが運んだ土砂で埋没するにいたった時間は短いと考えられるが、その出来事が起こったのは、今から約700～800年前の、13世紀～14世紀の約百年の間の出来事であろう。

f. 金属製品と動物遺存体

金属製品

金属製品は鉄製品が5点、銅製品が4点出土している。3以外はすべて河道埋土より、3はSD201上層埋土より出土している。

1および2は河道第4層より出土した。1は扁平なクサビ状の鉄製品で、4層より出土している。頭部幅1.4cm、基部幅1.3cm、厚さ3mm、残存長5.3cm、残存重量10.2gを測る。頭部はややつぶれていて広がっており、打ち込まれたときの衝撃によるものと思われる。

2は扁平な環状の鉄製品で、現代のワッシャーに似た用途不明品である。最大径は3.3cm、孔の直径は1.4cm、厚さ2mm、残存する重量5.2gを測る。X線透過画像の観察では内部に巣が見られるため、鋳造製品であることがわかる。

3は不定形な板状鉄製品である。長辺の片方が直線、もう一方は弧状になるが、製作時のオリジナルな形状なのか、欠損したものであるのかは不明である。残存長5.4cm、最大幅2cm、厚さ3mm、残存重量5.1gを測る。内部は比較的均質で、」鍛造品と考えられる。

4は河道5層出上の鍛造頭巻釘であり、打ち込み時の衝撃で頭部が曲がったようである。また打ち込まれた時か引き抜かれた際に基部中央あたりで折れ曲がったようである。断面形はほぼ正方形を呈する。残存長3cm、頭部幅6mm、基部幅5mm、残存重量1.5gを測る。

5は第1層より出土した、鍛造鉄釘の基部のみの残欠である。断両はほぼ正方形で、残存長2.8mm、幅4mm、残存重量0.7gを測る。

6～9の銅製品はいずれも河川内5層より出土した。6は銅銭の完形品である。銭種は銭文が真書体の「元豊通宝」で、初鋳は1078年、北宋よりの渡来銭である。

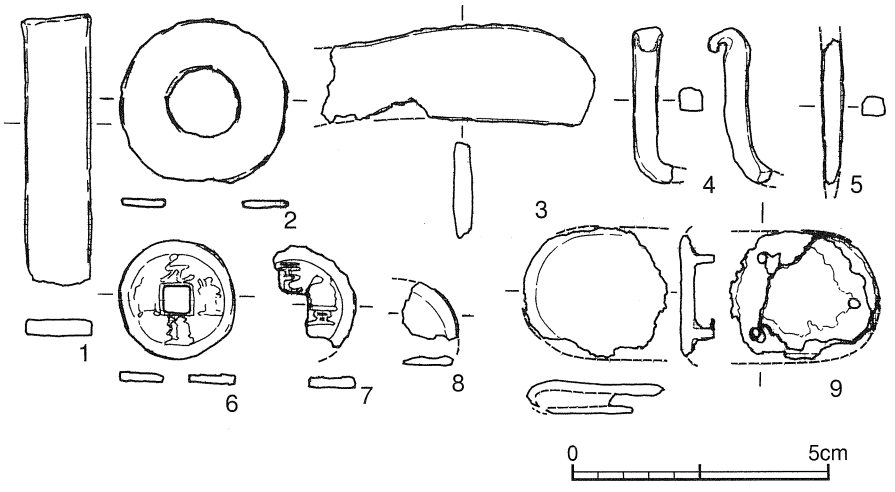


図12
出土金属製品　実測図

銭径2.3cm、厚さ1.4㎜、重量2.5gである。

7は全体の1／4のみ残る銅銭の残欠で、銭文が蒙書体の「元豊通宝」である。初鋳は真書体同様1078年である。厚さ1.7㎜、残存する重量0.7gである。

8は銅銭の破片であるが、小片のため銭種は分からない。残存する重量は0.2gである。

9は銅製帯金具の蛇尾である。蛇尾は革帯の鉸具の逆端に装着される金具で、律令期の位階制に基づく官位をあらわす装身具のひとつである。

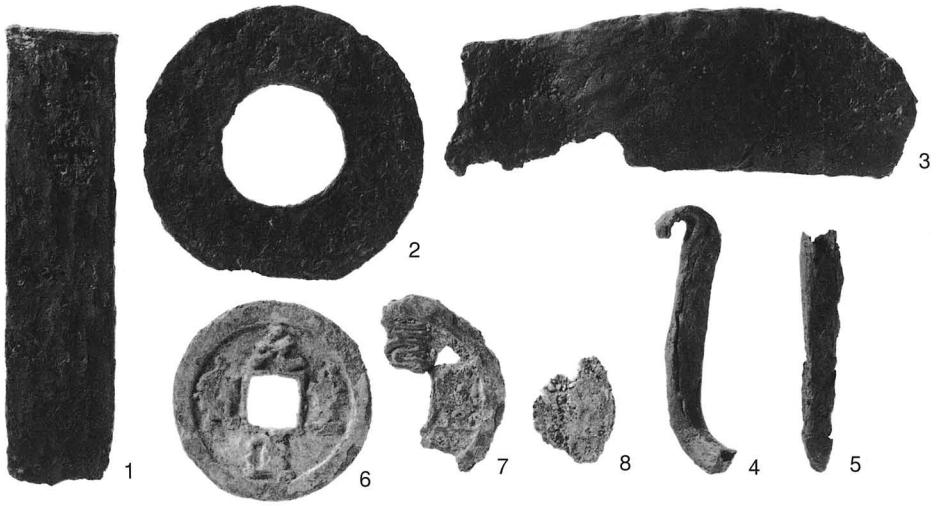


写真2　出土金属製品

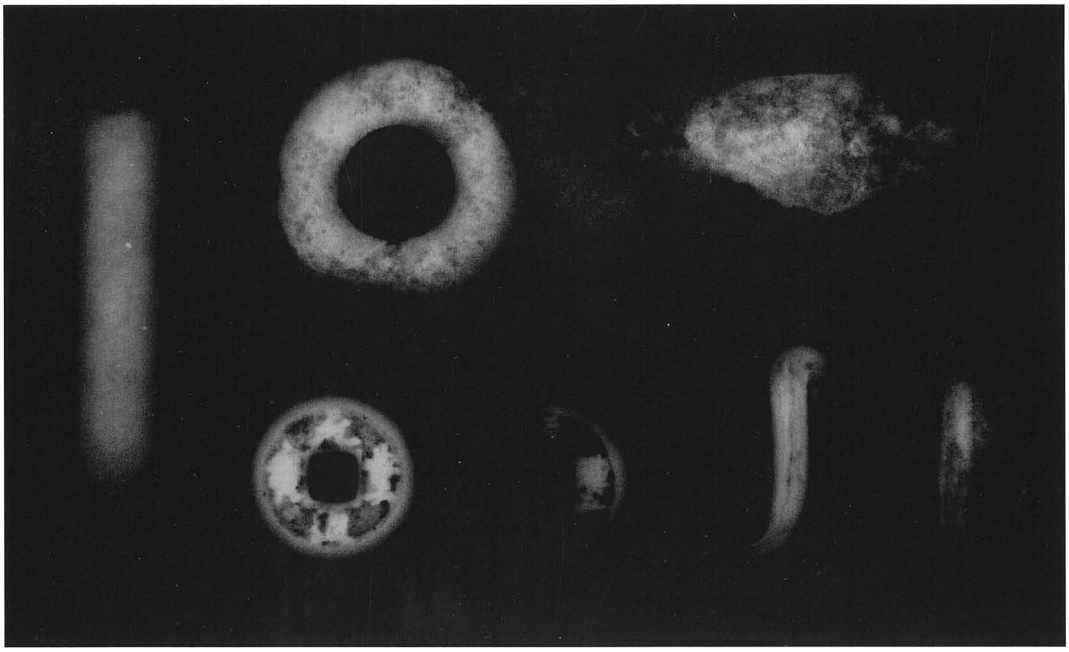


写真3　同X線透過像
（1：80kVp,3mA,50sec　2～7：70kVp,3mA,40sec）

大きさは、残存長2.9cm、残存幅2.6cm、残存重量は7.0gを測る。構造は、表板内面に作りつけた３本の脚鋲を、それにあわせて穿孔された裏板の孔に貫通させて鋲頭をかしめ、固定している。鋲の太さは約2.5㎜で、長さは約4.3㎜である。これらの数値から復元できる帯は幅2.4cm（８分）、厚さ3.5㎜前後と考えられる。また表面は腐食が激しいが、裏板の表面に茶色を帯びた塗膜がわずかに観察でき、漆が塗布されていた可能性がある。

9

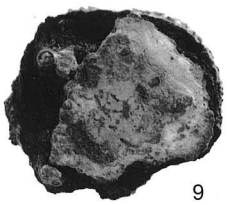

9

写真4　出土帯金具（左：表、右：裏）

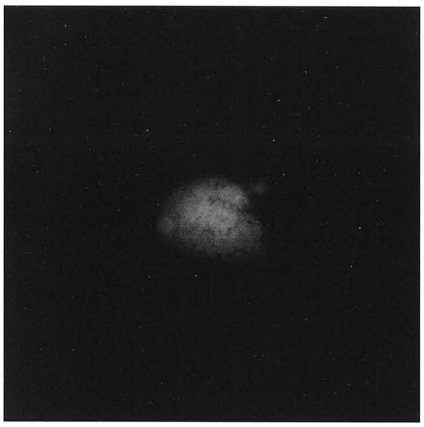


写真5　同X線透過像
（80kVp,3mA,50sec）

b. 動物遺存体

SD01より牛歯が１点出土している。

ウシ成獣の上顎後臼歯であるが、破片のため左右ははっきりしない。エナメル質の高さ約3.2cmを測る。律令期の動物利用を考える上で重要な資料である。

写真6　　出土牛歯

第4章　まとめ

今回の調査の結果判明したことをまとめてみると、以下のようになる。昔この場所で何が起こったかを、時間の経過に沿って記していこう。

飛鳥時代（1400年前）

今から約1400年前の7世紀ごろ、今回の調査地よりも西側には、集落が大きな範囲で広がっていた。ちょうど今回の調査地の場所には、ムラの用水路として溝が掘られており、人々は日常生活で不要になった土器などのごみや、ときとして動物の遺骸なども捨てていたらしい。今回の発掘によって発見された時、この用水路の中からはたくさんの土器のかけら、動物の歯の破片などが真っ黒な粘土とともに出土している。

集落の境界線？

ちょうどこの溝の付近が、当時のムラの一番東の果てだったかもしれない可能性が考えられたが、それは溝を越えて東側へ進むと遺構はなく、遺物を含んだ推積層もない事から導かれた仮説である。

ムラの存続期間

飛鳥時代にここに溝を掘った人たちは、溝の西側に集落を作って、鍛冶を行い、鉄製品をつくったりして生活していたが、そのムラは飛鳥時代が終わったあとも、奈良時代～鎌倉時代までの長期間にわたって存続したということが、平成10年に行われた第1次調査の結果からわかっている。

しかし今回の調査区では、7世紀の溝があった以外に、その後の人間の活動を物語るようなものは何も見つからなかった。

中世のできごと（800～700年前）

その後の時代に造られた遺構もあったのかもしれないが、13～14世紀にこの場所に川ができたため、それ以前の地層をすべて洗い流してしまったのである。川が地層を押し流した場所に本当はなにがあったのか、いまとなっては知る術はない。

中世のムラは？

では飛鳥時代のムラからさらに600年ほどたち、川が流れていた13～14世紀の当時は、このあたりの人間は、どこにムラをつくって生活していたのだろう？

この擬問について、川が調査区の総面積の約80%を占めているため、陸地はわずかしか確認できず、遺構も発見できなかったため、確かな答えを得ることができなかった。しかし、川の流れによって運ばれた川砂の層の中には、多量の土器が混じっていた。

洪水で押し流された集落

このことから、川の上流にあたる今回の調査区のより北西側のごく近い場所に、13～14世紀のムラがあったが、ある日川ができるきっかけになった鉄砲水に襲われ、いっきに押し流されたのではないかと考えられる。

やがて時間がたって川が埋没したあとの13世紀以降も、この場所で何がしかの人の活動はあったはずだが、そのような証拠となる痕跡は、何もこの場所にはとどめていなかった。現代の高層ビルで、13世紀の川の層より上に堆積していたはずの地層が、すべて破壊されていたためである。

飛鳥時代集落の範囲

今回の調査の成果は、第1次調査で発見された飛鳥時代の集落が、どのくらいの規模で広がっているか、部分的ながらも確認されたことである。第1次調査で発見された、飛鳥時代の鍛冶師のムラは、1次調査当時の予想よりさらに南へ広がっていることがわかった。

今回の調査区の東側には、この時代の遺構が広がっていないことから、第2次調査地が、二宮遺跡という集落の東の端である可能性が出てきた。おそらく第2次調査地より西、および南には、飛鳥時代の集落がさらにひろがっており、北は少なくとも第1次調査地までは間違いなくムラの中であると考えられる。

調査の成果と意義

集落の範囲が一部でも限定できれば今後の発掘調査において有効な資料となるし、今後の展開によっては神戸市内でも発見例がすくないといわれる、飛鳥時代の集落がどんな様子をしていたかについて、貴重な情報を多く得ることも期待できるようになるだろう。そういった観点からも、今回の第2次調査の成果は大きいものであったといえる。

参考文献

『古代の土器　都城の土器集成』Ⅰ～Ⅲ　1994年　古代の土器研究会　編
伊藤　晃　「備前」(『概説　中世の土器・陶磁器』) 1995年　中世土器研究会　編
森田　稔　「中世須恵器」(『概説　中世の土器・陶磁器』) 1995年　中世土器研究会　編
尾上　実・森島　康雄・近江　俊秀　「瓦器椀」
(『概説　中世の土器・陶磁器』) 1995年　中世土器研究会　編
伊野　近富　「土師器Ⅲ」(『概説　中世の土器・陶磁器』) 1995年　中世土器研究会　編

写真図版

1．飛鳥時代の用水路（北方向から撮影）

今回の発掘調査では、今から約1400年前の飛鳥時代に使われていたと思われる、用水路の遺構が発見された。
この遺構の中からは、当時の土器や帯金具などの遺物が出土したものの、遺構の大部分は13世紀にこの場所を襲った土石流によって流されてしまっていた。

2. 飛鳥時代の用水路跡から出土した土器（北方向から撮影）
用水路内には、真っ黒な粘土が堆積しており、中からは多くの土器片が出土した。

3. 飛鳥時代の用水路跡から出土した土器（北西方向から撮影）

4. 13世紀に流れていた河川の跡（北方向から撮影）

飛鳥時代には、今回の調査地一帯にはムラが営まれており、そのムラの跡が遺跡となって残されていたと考えられる。
しかしムラが営まれていた飛鳥時代から700年ほどたった13～14世紀ごろ、この場所を土石流が襲って、その後しばらく河川となっていたらしい。飛鳥時代のムラの大半は、13世紀の河川の流れによって押し流され、失われてしまった。

5. 13世紀の河川跡と東岸（南方向から撮影）
ごくわずかに河の両岸の地形も確認できた。13世紀の川岸は川の流れによって、えぐれたような形をしていた。

6. 13世紀の河川跡と東岸（西方向から撮影）

7. 13世紀の河川跡と東岸（北方向から撮影）
13世紀の地面である、川岸には、人間の生活痕は何も残されていなかった。

8. 調査地北端で確認された時期不明の遺構（南方向から撮影）
河で削られずに残っていた時代不明の遺溝。川が発生する以前からの地層が発見された。

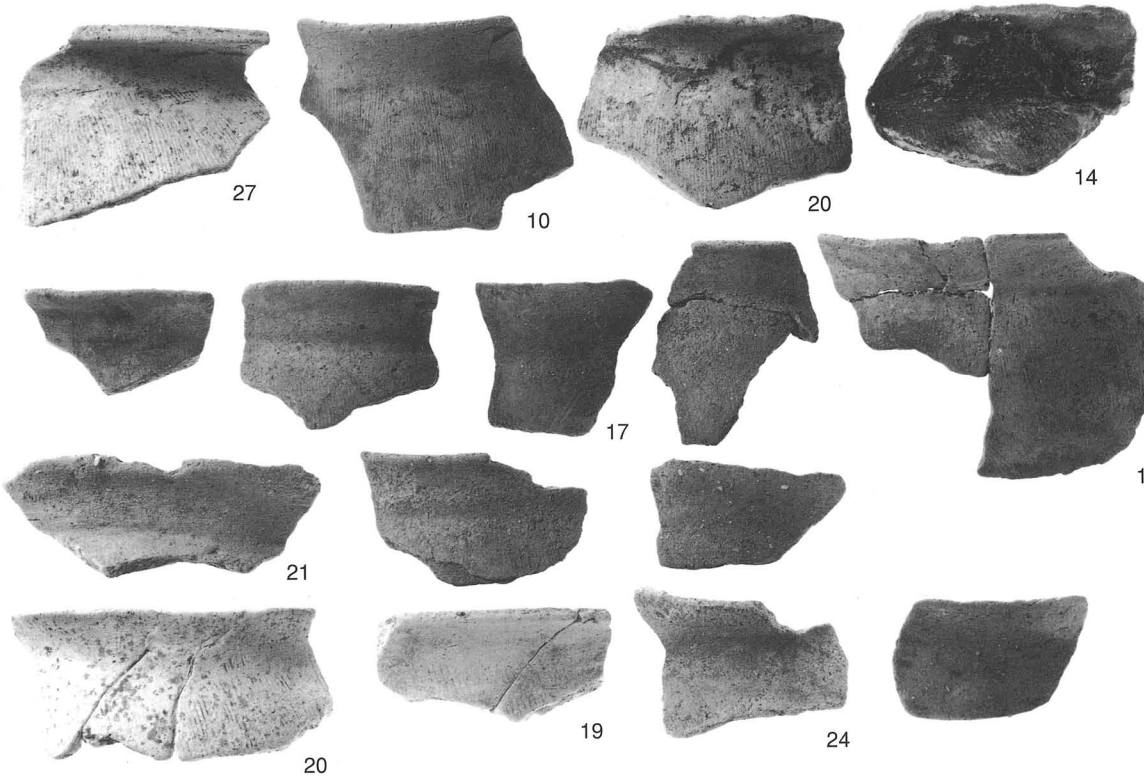
22

15

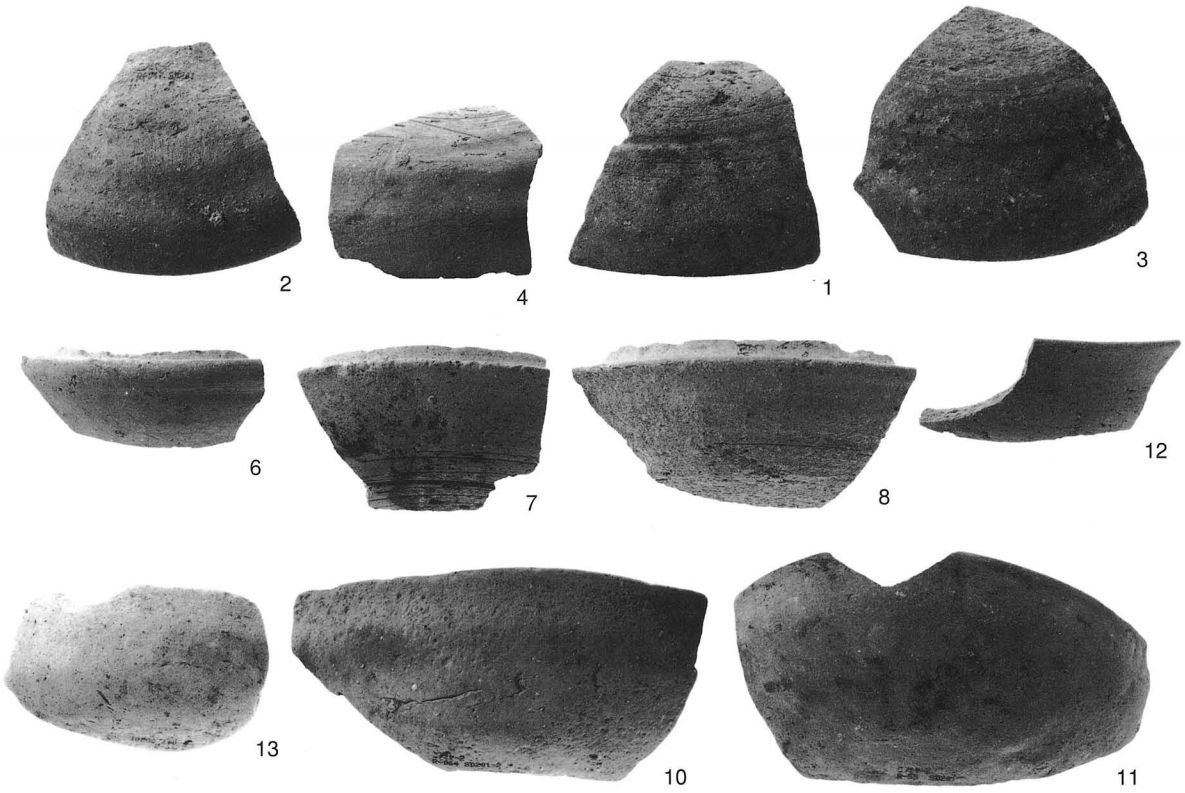
28

19

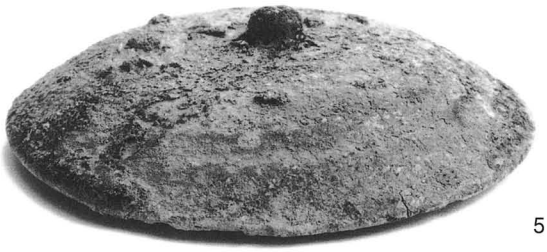
9. SD201（飛鳥時代の用水路）出土　土師器



10. SD201（飛鳥時代の用水路）出土　土師器



11. SD201（飛鳥時代の用水路）出土土器



12. SD201（飛鳥時代の用水路）出土須恵器　蓋

13. SD201（飛鳥時代の用水路）出土須恵器　坏

14. SD201（飛鳥時代の用水路）出土須恵器　坏

15. 13世紀の河川内第5層出土の須恵器　皿

16. 13世紀の河川内第5層出土の瓦器　皿

17. 13世紀の河川内第5層出土の須恵器　皿

18. 13世紀の河川内第5層出土の須恵器　皿

46

19．13世紀の河川内第5層出土瓦器　埦

47

20．13世紀の河川内第5層出土土師器　皿

49

21．13世紀の河川内第5層出土土師器　皿

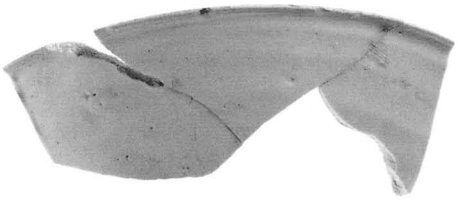
22．13世紀の河川跡第5層出土の緑釉陶器

23．13世紀の河川跡第5層出土の灰細陶器

33

25．13世紀の河川跡第5層出土の須恵器

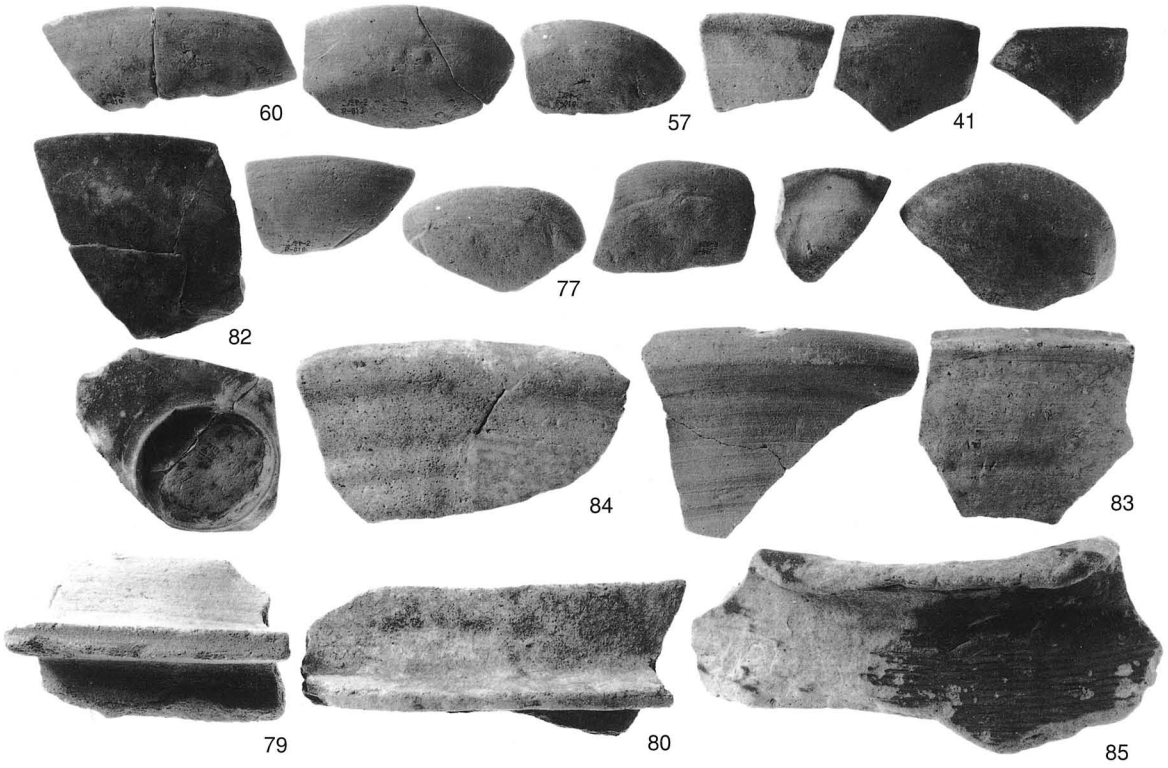
26．13世紀の河川跡第5層出土の蛸壺



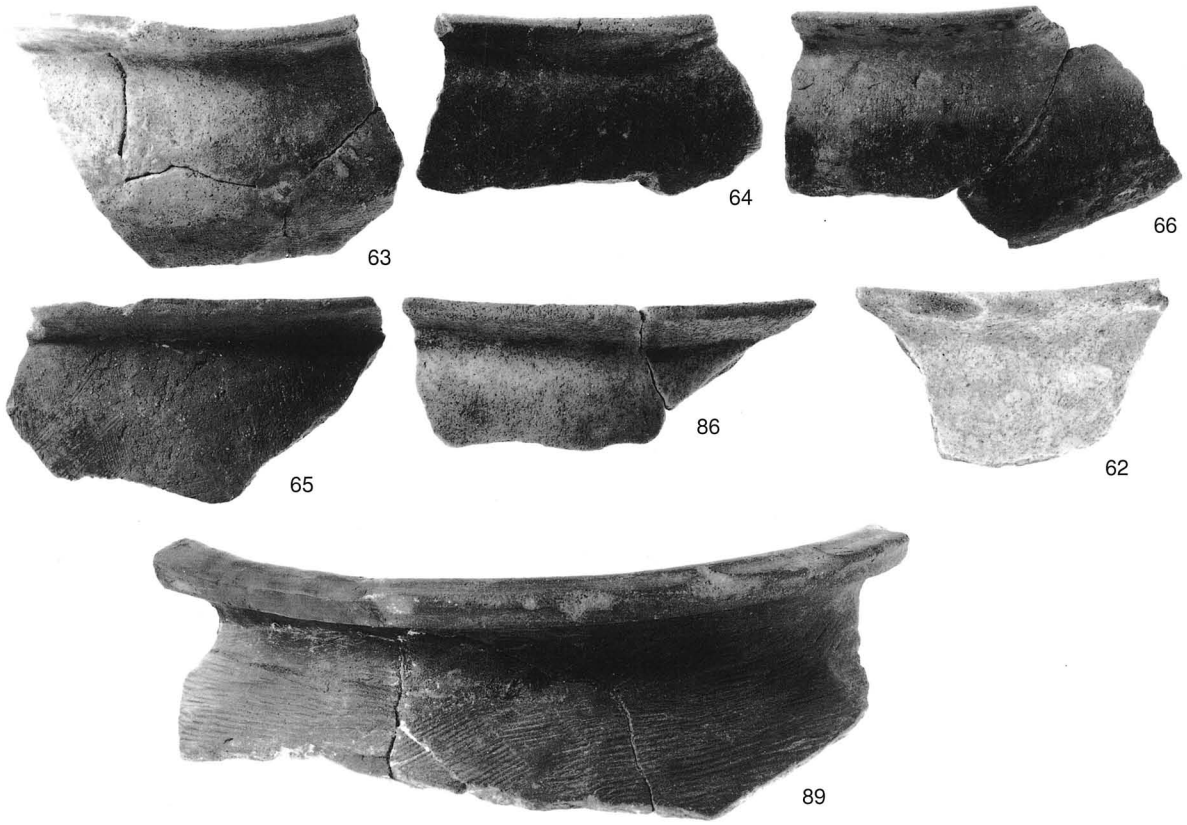
24．13世紀の河川跡第5層出土の白磁　埦

28．13世紀の河川跡出土の銅銭

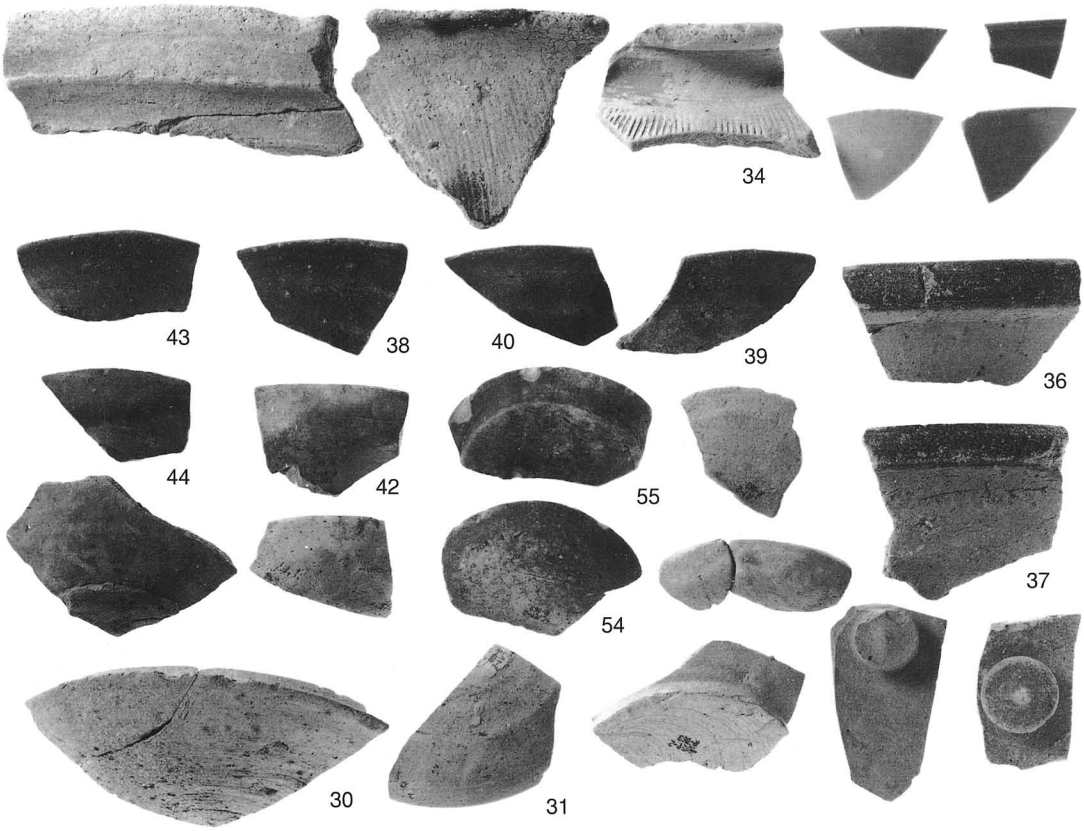
29．SD201（飛鳥時代の用水路）出土　帯金具



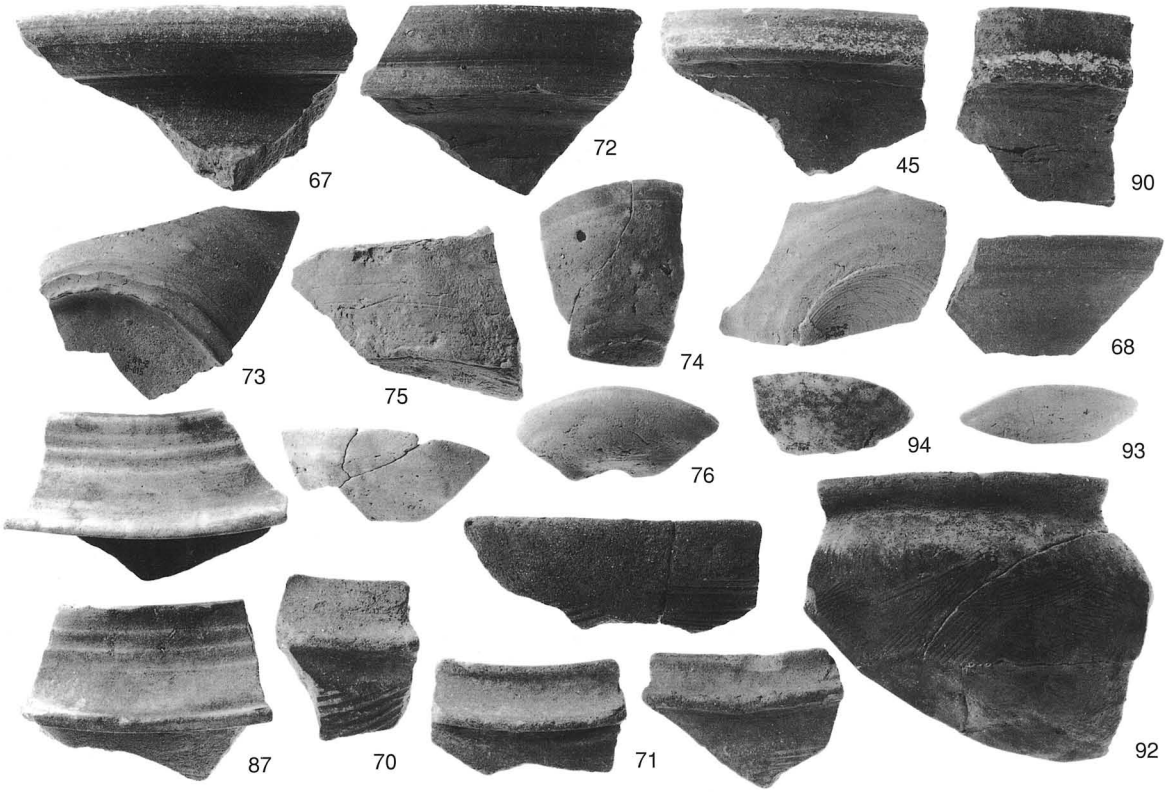
30．13世紀の河川跡第2層と第5層出土の土器



31．13世紀の河川跡第2層と第5層出土の土器



32. 13世紀の河川跡第5層出土の土器



33. 13世紀の河川跡第1層と第4層出土の土器

報告書抄録

ふりがな	にのみやいせきはっくつちょうさほうこくしょ　だい2じちょうさ
書名	二宮遺跡発掘調査報告書 — 第2次調査 —
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	石島　三和
編集機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号　☎078-322-6480
発行年月日	西暦2003年11月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にのみや 二宮遺跡	ひょうごけん こうべし 兵庫県神戸市 ちゅうおうく にのみやちょう 中央区二宮町 にちょうめ 二丁目	28110				20030219 ～ 20030326	320	民間共同住宅建設事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落址	飛鳥時代・中世	溝1条・旧川道	須恵器・土師器	

Ninomiya Site, a,Settlement of the Kofun Period, Japan
Report of the 2nd Archaeological investigation
Edited by Ishjima, M.
Staff of the Kobe－City Board of Education Secretariat.

2003 by the Kobe－City Board of Education Secretariat.
Printing in Japan by Kyokuseisha Co., ltd., Kobe

The Kobe－City board of education.
6－5－1 kanoutyo, Chuo－ku, Kobe, Japan
Phone：078－322－6480

二宮遺跡発掘調査報告書－第2次調査－
平成15年11月

発　行　　神戸市教育委員会文化財課
　　神戸市中央区加納町6丁目5番1号
電　話　　078－322－6480
印　刷　　株式会社　旭成社
広報刷物登録・平成15年度第220号（A-6類）

この冊子は再生紙を使用しています